
STAGE OF

さくたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAGE OF

【Zコード】

N9488M

【作者名】

さくたん

【あらすじ】

これは美少女…ゲフン！

元対人恐怖症の男の子風巻奈於と
その周辺をとりまく人々の
学園シリアルスコメディーだと思つ。

プロフィール

6月現在で考えられています。

・風巻奈於
しまきなお

age 14

birth 10月23日

158cm 41kg

A型

<好き・得意> 水泳・果物・スイーツ

<苦手> 生きてるもの全般

本編主人公。水泳部所属。生まれた時は医者が女子と間違えかけて女子の名前に。

結局男として戸籍は取れた(それについてはまたエピソードが)
間違いなく美少女だが、れっきとした男子…どちらでもいいけど。
両親が火事によって他界、姉が留学しているので、現在1人暮らし。
水泳はめちゃ速いが、ほかのスポーツに關しては微妙。

意外と甘いもの・お笑い大好き。けつこうバカ。

中1のときプールで彼女が自殺し、それにより対人恐怖症に。
しかし幼馴染や家族の協力により、なんとか立ち直る。

・樹雨澪
きさめみお

age 15

birth 6月6日

159cm 43kg

B型

<好き・得意> チーズケーキ・風巻くん

<苦手> クモ

光鳴湾中学校前期生徒会長。メインヒロイン。中2でここにやつてきた。

元陸上部だったが、水泳部へ転部してきた。

茶髪のポニテで、澄んだ瞳。浴衣の似合う美少女。だけれども数々の武勇伝をもち、噂もたくさん飛び交っている。

成績も1番で、スポーツなんでもできるので、近寄りがたい。

しかし本当は、単純かつ純粋な性格で、

突飛な行動ばかり起こすから勘違いされているだけ。

子供みたいにはしゃいだりすれば、お姉さんのように優しくなった

ちなみに両親がいないので、故郷の祖母からいろいろもらひながら一人で生活している。

・水野晃弘
みずのあきひろ

age 15

birth 4月21日

165cm 58kg

O型

<好き・得意> スポーツ・写真

<苦手> 学問全般

風巻の幼馴染。水泳部所属。たぶん半袖短パン似合つんじゃないのかな？

運動神経の高さは並ではない。ただし正真正銘のバカである。

父と母、兄とで暮らしている。

乗り物酔いが激しいので、いつもポケットに酔い止めを忍ばせている。

写真撮影が趣味。特に女子の。

彼の撮った写真は学校の男子に人気だとか。

・ 海野原慎也

age 14

birth 7月5日

171cm 58kg

A型

<好き・得意> ライトノベル

<苦手> 漢字に“瓜”を使う食べ物
テニス部所属。風巻の幼馴染。

成績は2・3番くらい。顔立ちはとてもいい。

父、母、姉、弟の5人家族。

まじめに見えてものすごいお調子者なので誰とでも友達になれる。
転校してきたばかりの澪とともに話せたほど。

考えが昭和臭いが、それを本人に言つたら拷問されるとか。

・ 坂本翔

さかもと しょう

age 14

birth 8月16日

163cm 49kg

O型

<好き・得意> アニメ・数学・パソコン

<苦手> 上記以外全部

パソコン部の部長。アニメやグラフィック、CGを作れるなど、

中坊とは思えないほどの技術がある。

数学は神様。以外壊滅。運動音痴でもある。

いろいろできるので、自分は天才と思っているナルシスト。
実際バカなのに。

・沫雪莢香

あわゆきさやか

age 13

birth 1月29日

142cm 31kg

A B型

<好き・得意> 機械全般・料理

<苦手> 運動・スポーツもろもろ

主要人物唯一の中学2年生。パソコン部所属。

ふわっとした髪で、かわいらしい声をしている。

技術・家庭科に関しては先生をも上回る実力だとか。

機械はなんでも直すことができる。

また、料理も上手で菓子作りは天下一品。

運動神経については皆無。残念。

・河本真夏

かわもとまなか

age 14

birth 7月2日

153cm 40kg

A型

<好き・得意> 小説・水泳

<苦手> 刃・サスペンス系

元水泳部、中1の冬のとき、一家全員（真夏以外）が殺される事件がおこり、

真夏自身重症を負った。現在パソコン部。

セミロングの避暑地のお嬢様タイプ。実際貧乏。

成績は上の中くらいで運動もそこそこ。

男子からは人気があり、ファンクラブたるものも存在するらしい。おそらく彼氏がないのはクラブが関係していると思われる。

・ 梶沢 梶
かじわざわもみじ

age 15

birth 4月18日

156cm 36kg

O型

<好き・得意> 生物・甘いものみんな愛してる
<苦手> レモン

テニス部所属。ボーアイッシュな「ボク少女」で女子に非常にモテる。
1年のとき奈於と同じクラスになり、奈於が引きこもった際に
面倒を見てくれた1人で、奈於からすごい感謝されている。
友達思いな性格と持ち前の明るさからか、友達の数は
学校の壁を越すといわれている。

ちなみに頭は慎也と争うほどによそ。慎也とは昔からのライバル。
現在彼氏募集中。

・ 風巻茜
しまきあかね

age 22

birth 10月23日

171cm 47kg

B型

<好き・得意> 音楽・弟
<苦手> 暗記もの

奈於の姉、奈於の女子顔が納得できるほどの美女。

ただしロリコン・ショタコン・グラコン（brotherコンプレ
ックス）の

人間的におかしい人。ゆえに奈於を心の底から愛している。
奈於を振り向かせるならどんな卑猥なことだってする。困った人だ。

けれど姉らしく、奈於の面倒はしっかりと見て、アドバイスなんかも与える。

なので奈於は姉さんのことは信じきっている。

奈於が中一になりたて4月にウィーンへ留学。白い服を着た子供たちと

いつしょに歌っていた。音楽学校出身、歌声は神。

奈於に勉強を教えられる程度の学力はもつている。

1 - S t S T A G E O F S W H M (前書き)

とにかく理由があつて改稿版を出しました。
あつと前よりもしろこめず…！

1 - S t S T A G E O F S W I M

正直、今どうしていいか分からない。

文化祭で漫才しただけで、今の状況には普通はならない。

誰か、誰かこの状況を上手く脱却できる方法を教えてくれ。

僕は今、告白されました。

「「まー、どーもー。」」

Jの光鳴湾中学校は、6月の文化祭の真っ最中だ。

企画の一環で舞台で漫才をしているのは…

「風巻奈於と、」

「つぐる…あつ 水野晃弘です。」

「そのネタは一般人には通用しないー。」

「いやー、今日はほとんどたくさんの方たちが…」

「いや違うよー国際原子力機関ー？来てんのー？」

「あれ？」AXAも…」

「来てないー宇宙規模ですかこれは。」

「みなさん宇宙食を食べながら楽しんでくださいね。」

「普通に楽しんでいくてくださいね。」

「いやでもまあ…。」

「ん？」

「この時期だもんでは、青春したいじゃん？」

「まあ僕ら地味だもんな。」

「告白とか青春感じるよね。」

「どうこう観点か知らないけれど・・まあね。」

「だからちょっとシミュレーションしてみない？」

「いいけど・・設定は？」

「尚人は告りうとしている人、俺はそれを見守る友人ってことで。」

「ああ…あの子が近くに…。」

「「」の際告れば？」

「でも恥ずかしいし…。」

「悪氣出せりてー。」

「じゃあちよつと練習。」

「うん。」

「あ…あの…。」

「うん?」

「メ…メアド交換しない?」

「あ～。違つね。」

「何が？」

「告白だから気持ち伝えないと。」

「なるほど。承知した。」

「あ…これ僕の気持ちですー！」

「ん? なに?」

「水炊き。」

「どうしよう…！」

「あ、焼肉定食の方が…」

「それもない！ ていうか物渡すならラブレターとか…。」

「あー。最近流行ってる二行ラブレターとか。」

「それもいいね。」

「晃弘なにかない?二行。」

「…いきなり振るの?まああるけど。」

「どなんの?聞かせて。」

君は会うたびに、いつも手を振つてた
鈍感なふりして手を振つてたけれど
ほんとほんと照れくさくてうれしかった

「…うわあ。」

「なにその反応…」

「妄想は悪いことじゃないから…。」

「ああ、お前嫌われるわー不幸の手紙に埋もれてしまえー。」

「ひじーーその言こ草はないよ晃弘ー。」

「ていうか誰が好きなの?」

「うん、実は生徒会長なんだ。」

「そりばだ風巻、安らかに眠れ。」

「えーなんで死ぬ前提なのー?」

「樹歛漆だろ?あいつに告白したまつは振られた後半殺しこされる
との噂だ。」

ほんとこひくでもない噂だ。

それで、ソーシャルワーカーアドリブでも入れてみよつー。

「それでも僕は、あいつが好きだ。またに憧れの存在だから……。」

充分に告白だよねこれ。

「よし。特別にいじ精神科医を紹介してやる。」

やばい。本気だと思つてる。

「ま、まあ冗談はこれくらいにして。」

「冗談かよー笑えないからなこれー!」

危なかつた…けど今思つた。後始末がこわい。

今のところなんとか筋は通つてゐるナビ、実際はもうアドリブの風だ。

でもここで起死回生のボケをすれば…ひかるはずー。

「せんとせ…」

「ん? なんだ?」

「ウサギに恋してしまったんだ。」

観客席からやかんを投げられた。

「おつかれ! おもしろかったよ。」

「おお慎也ーなんか納得いかんがありがと!」

話しかけてきたのは海野原慎也だ。

頭いいし顔もいいので、その顔面をつぶしてやりたいとつべづべ田
う。

「でもあの会長にケンカ売るとは……。」

「ネタだから心配無用……」

「君が風巻くん……？」

「うん、死亡フラグだね。」

樹雨澤にはいろいろな武勇伝があるらしい。成績も運動も容姿も並
外れて良いのに、

S気質なので周りから恐れられているとか。

見て「うらや。初対面なのに」のやまだよ。

「私のことすきって……」

「いやア、こ……これは……」

「……感動しました。」

「はっ？」

「あの告白感動しました！ 私も……あなたのことが好きです！」

「 」・・・・・
「 」—?「 」

1 - S t S T A G E O F S W I M (後書き)

文も長くなつていきます。そのぶん話数は減るだらうと…

1・1 水泳部諸君（前書き）

「で結局付きました」とこなつたんだ。」

「断つたら何がわかるか分かんないもん。」

1・1 水泳部諸君

昨日の出来事がまだ鮮明に残っている。夢じゃなかつたのか…。

あの後会長は、僕の“仮”の彼女となつた。（むりやうそをせら
れた…）

これじゃ練習も充実しないよ…。

僕、風巻奈於は水泳部に所属している。水野晃弘も水泳部だ。

ちなみに女子と合同で、総員8名と少なめ。

いま僕らは、6月の総合水泳大会に向けて、総合1位をとるために必死で泳いでいる。

僕は一十五メートルクロールを十三秒五で泳ぐ、学校最速記録保持者だ。

晃弘は五十メートルの平泳ぎで三十九秒八だ。十分に速い。

大会は十二日…いま八日なんだと5日ですね。

「やつぱ練習はきつこな。」

「将軍のメニューは疲れるんだよ…。」

“将軍”といひのは水泳部の顧問の先生のあだなんだ。
かなりメニューが厳しいことで有名だが、有名な選手を育て上げた
のも事実だ。

「それよつ会長との成り行きをどうしよう。」

「じゃああれだ。振りぢゃえよ。」

「いや…やめとく。後々めんどくさいことになつやう。」

「それもやうだな。」

噂からすれば、半殺しだされそつだもん。

「でも会長活やつてたつけ？」

「陸上部だぞ。知らないのか？百メートルを十一秒で走れる」と。

「興味なかつたし、僕がまた登校し始めたのは一年の二学期からだ
ったから。」

「そう…だったな。」

僕はいわゆる対人恐怖症だ。中学一年生のとき、僕の目の前
で、

彼女が飛び降り自殺をしたのを境に、完全にまじってしまったのだ。

いや……前々から情緒不安定だつたんだけど。

けれど幼馴染の晃弘と慎也、家族や友達、さまざまな人たちの協力の甲斐があつて

今はなんとか楽しく過ぐしている。

みんなに恩返しをするために、僕は全国大会を目指している。

「まあ、会長さんとがんばつていーい関係を築いてこい。花束は用意しておく。」

「それが葬式で使われる」とがなこととを必死で祈るよ。」

「ははは、まあがんばれ。」

つたく…ほんとうひひひ。

次の日の部活。

「諸君、今日から新たなライバルが増えるだ。」

いちいちみんなを諸君と呼ぶのはやめてほしー、とつべづべ思つ。

「風巻、文句があるなら隨時受け付けでやるだ。」

恐ろしいね。

「そんなことより、新入部員を紹介する。」

すると更衣室から出てきたのは茶色の髪にボニー・テールをまとめた
シーランドで、

スレンダーで容姿端麗な美少女…つてまさか…！

「（）紹介しよう。わが校の生徒会長樹雨澪だ。」

「わけあって陸上部から転部してきました。短い間だけどよひじく
ね」

そう言つと茶髪は僕にワインクをしてきた。

これで転部してきた理由が分かつた気がする。

「よかつたな風巻。いい彼女がいて、俺はつらやましこぞ。」

「まだそんな関係じや…つてまつて将軍！なんでそんなこと言いつの
！？」

なんだか、みんなが僕を冷やかしの田で見てる気がする。

それにもなんでも将軍がそんなこと知っているんだ?

「…あれい。」

晃弘が田を見開いてるのは分かる気がする。だつてきれいだもん。

やつぱり彼女にするにはもつたいない…

つといかんいかん! そんな田で見たら死の危険がやってくるかもしれない!

「…………」「」 パーパーパーパーパ

もちろん男ノ部員かい。

1・1 水泳部諸君（後書き）

ほんとは澪の髪型はツインテール片方だけ（左耳）ところがものなんですよ。

あれなんていうんだろう？

1 - 2 齊威のタイム測定（前書き）

いくつか変更しました（8月7日）

風巻尚人 風巻奈於

御神渡慎也 海野原慎也

淡雪莢香 泡雪莢香

1 - 2 脅威のタイム測定

「えー、ではタイム測定を始めよ!」

会長の自己紹介が終わつた後、将軍はそつと告げた。

実は一週間前に大会選手選択審議会（つまりタイムが速い選手選べばか！）

があつたのだが、会長が転部してきたので再選出することになつたらしく。

協会への選手表の提出は今日が締め切りらしいので、変えても問題はない。

「それでは水野。種田は50メートル平泳ぎ男子の部で間違つてないか？」

「はい。 もちろん。」

「それでは位置に着け。」

水泳のタイムではスタートが肝心だ。飛込みではできるだけ長い距離を飛べば

タイムは稼げる。でも飛びすぎるとそれが裏目にでてフォームが崩れてしまつ。

ちなみに飛べる人は六メートルも飛んでいる。

「オーケーですよー。」

「それでは…よーい」 ピー！

ブザーが鳴り、晃弘は水面に飛び込んだ。

ちなみに平泳ぎは胸の前で一かき、足で一蹴りという動作を繰り返す泳ぎ方で

「ブレスト」とも呼ばれていたりしている。

推進力が四泳法中最も無くて、馬力がけつこつ必要な泳ぎ方だ。

晃弘は僕とは違つて馬力がかなりあるので、クロールよりこつちの方が向いている。

さあ、そういうしてゐるうちに晃弘は折り返したようだ。

ちなみに平泳ぎは4泳法最古の泳法で、1837年にイギリスで行われた

世界で最初の水泳（競泳）大会から1896年の第1回オリンピックの頃まで

平泳ぎが主流とされ、自由形として競われていたんだ。その後、1900年に

クロール泳法が生み出されたことで、1904年の第三回オリンピックから

平泳ぎは独立種目となつたんだ。

今は自由形といえばクロールで泳ぐことなんだけど

オリンピックで日本人が最も多数の金メダルを獲得している競技でもあるんだ。

「水野32秒47。」

「あ、晃弘もう終わつたんだ。」

32秒47は中学生ではかなり速い部類に入ると思ひ。

「おつかれ、タイム上がつたじやん。」

「俺が泳いでいる間に豆知識とは、貴様いい度胸してゐるじやないか。」

さて、どうしたものだか。

「

ひとつひとつ僕の出番だ。前は調子よくなかったから挽回したい。

「風巻。種田は50メートル自由形女子の部で間違つてないよな?..」

それともの延髄を破壊してやりたい。

「将軍、僕は男です！」

「失礼、男子の部だな。」

そろそろいいかげんに男として認識してほしい。

「将軍、準備できました。」

「よひし。それでは…」

静寂の間がこのプールを支配する。緊張を破る音が鳴り響いた。

「よーい！ ビーーー！」

クロールを泳ぐ際、速く泳ぐには様々なポイントがある。

まず手は人差し指から水にはいると抵抗が少ない。

手を真っ直ぐに入れてしまうと、水の抵抗を受けてしまい、遅くなつてしまつ。

水の中に入った腕は、思いつきり肩から伸ばすようにして前に出す。

胸のあたりをかいているときに顔を横に上げ、息継ぎをする。

キックはももを動かして蹴る。ももをしっかりと動かして、膝、足首へと折れずに

柔らかく曲がるように運動させることが大事だ。足首は力を入れず
にブラブラの状態にして、

膝は力を真っ直ぐに伸ばす。

僕はこれら基本的部分を相当練習した。そのおかげで全体的に抵抗
が少なくなり、

推進力もかなりついた。あとはリズムだ。ピッチも徐々に上げてい
き、ブレない様にするだけ。

クイックターンも上手くきめ、残りはあと少しだ。ここからが正念
場。

ここから少しペースが効つてしまふのが弱点だったので、持久力を
上げるために

毎朝長い距離を走っている。こいつ練習でも水泳のタイムは上が
ると思うのだ。

ラストスパート、水が僕をゴールに到達させまいとでもいうよ
うにとても重く

のしかかってくる。けれどそれに逆らい、勝利の舞台に到達した。

「風巻、25秒61。」

『『なんだとーー?』』

みんな見たかい?これが努力の賜物なんだよ?

『す…すげえ。全国レベルだ。』

『また学校最速…いや、これは県最速レベルかも。』

『神だ!神がいるぞー!』

『かつこいい…さすが僕の未来のお嫁さん…。』

なんかおかしな声が聞こえた気がする。

『さすが風巻、新入部員に田にものを見せたな。』

『ははつ、そうですね。』

『くう…わたしだって負けないんだから!』

「いいから余裕」と「いざやき」のタイムに勝てるわけがない。

勝てたら日本中学記録更新できぬし…

「樹雨。種目は何にするか？」

「50メートル自由形で。」

「それでは位置つけ。」

陸上部では100メートル12秒って今思ひと怪物だと思ひ。でも
水中だと

びひなるんだひへ.

「お手並み拝見だな、風巻の彼女の。」

「その言葉、すゞくひとつかかるんだけど。」

あれでも会長はモテてるつて噂うらしきからなあ……。

「オッケーです！」

「それでは… よーい！」

その瞬間、信じられないようなものを田の当たりにした。

ビーーー！

『『……えつー？』』

ブザーが鳴り終わるとき、すでに10メートルの地点にいる。

「えー？ 会長10メートルも飛び込んだー？」

推進力もかなり速くて… なんだろう、もつ解説のしようがない。

それから僕らは全員会長の実力に終始唖然としていた。

「あ…樹雨、25秒68。」

将軍ですら、こんなバケモノ見たことないと思う。すごい驚いているし。

「うーーー悔しいーーもう少しで風巻くんに勝てたのにーー！」

今氣にするヒジハサヒジがないと思つ。

「あのね会長や。僕に勝つたら中学校女子記録更新なんだよ?」

『『……チツ……』』

自分で言つて思つたが、今の言葉ものすこ嫌味だ。

「うう、他のじょほこヤツなんかより風巻くんには勝ちたいのー。そこはまた、すいい嫌味だ。

「ねえ~、風巻く~ん!」

「なんですか?」

部活が終わった帰り道、会長に呼び止められた。

「えへっ、次は絶対勝つてやるんだからー。」

「まだ言つですかーもしつかうと云つていますー。」

「あ、そうや。これからわたしを“会長”って呼ばないで。」

「はー?」

「“澪”って呼んでね。彼女なんだから。」

「はいはい……澪、わかつたから。」

「わたしは“奈於ちゃん”って呼ぶから。」

「僕を女子扱にするんですか！？だれも男だって認めてもらえない
ー」

「大丈夫、奈於ちゃんは男の娘だから。」

「もうダメだー！」

だれか僕を男って認めてもらえる人はいないのかな…。

「あははっ、これからもうしくね、奈於ちゃん。」

「うう…よろしくね、澪。」

澪は上機嫌で帰つていった。なんだかんだ澪は蹲とは違つて

かなりお茶目なのじゃないのかな？

とにかく、自由形で余裕で澪に負けないようにしたいと。

1 - 2 齧威のタイム測定（後書き）

この元1 - 3部分全部書き換えました。
大変だった…

1・3 アイツのフォトグラフ（前書き）

早く話数追いつかないとたいへんなことになるかも
ああ、宿題が…

1・3 アイシのフォトグラフ

「おはよー、晃弘。」

「おお、風巻、おはよー。」

昨日のタイム測定の翌日、いっしょのクラスの晃弘は、
今日もまた怪しげな商売をやっていた。

「今度はなに売ってるんだ……。」

「会長の競泳用水着写真。これは売れるぜ。」

「いつ撮ったんだ…？」

「将軍が職員室に戻つていった時だ。」

「こいつはよく写真を撮つて人に売つている。特に尊名高い女子の写
真が多い。」

ちなみにこの学校はカメラとアイホッドの持込みが許されている不
思議な学校だ。

なので僕も登校時には音楽を聴いているんだけど……。

「おまえの行為ばれたら絶対持ち込み禁止になるぞ……。」

悪く言えば、盗撮？だからねこれ。

「大丈夫。お得意さま限定なんだから、まだばれたりしない。」

けれどこいつの写真はとても綺麗だ。風景、人物の様々な特徴の全てを

機械のなかに収めている。僕も見せてもらったことがあるけど、これはかなり人が

集まつてくるわけだ、と納得できた。

「会長の写真はもとから人気だったんだが、こいつはまた大ヒット御礼かも。」

「これがばれたら処刑同然だと思つ。」

「ちなみに今の一番人気は、風巻の着替え写真だ。」

「ちょっとーなにやつてんだ！」

さては水泳部の更衣室で何度も撮つてたんだな！彼は誰にも気付かれずに

写真を撮つてくるからな……。

ちなみに胸がどういう言われているけど、競泳用の水着は全身仕様なので変にどうられない。

小学生のときに海水浴行ったとき、海パンで行つたら警察沙汰になつたしね…

「ちなみにこれがその着替え写真だ。」

その写真を見た時に、僕の眠気が一気に吹っ飛んだ。

な…なんといつか…僕こんな表情してたか?

男子のくせにか色っぽくて…そ…なんといつか…自分のくせにかわいい…。

改めて、自分の女子顔はほんと底知れないほど不幸だと思つた。

「ほー、奈於くんの着替え写真ねえ…。」

「わー慎也いつのまにー。」

「そんなに驚くことないだろー。」

こいつはこの前僕らの漫才のあとに声をかけた海野原慎也だ。実は同じクラスなのだ。

たしか…テニス部だつけ?レギュラーにも入つて頭もいいし、友

達も多い

完璧超人だ。もちろん身近にも「一人超人はいるんだけど…」。

彼とは幼馴染で、唯一僕を「奈於くん」って男子扱いしてくれるいい友達だ。

「この写真いいね。晃弘くん、今度フィギュア作って僕に売つてよ。」

少し距離をおいておいたほうがいいかもしない。

「昨日の澪ちゃんはすごかつたらしいね。」

「え? 知ってるの?」

「あれはネタになるでしょ。全国レベルの奈於くんと肩を並ぶ実力なんだから。」

「ていうか慎也は一年のとき会長と同じクラスだったんだろ?」

「え? そつなの?」

「ああ。一学期から転校してきてね、みんなメロメロだったよ。」

けれどあまりにも能力が高すぎるし、アタックした人はみんなひどい目にあつたらしく、

地元のヤンキーに襲われた時は、返り討ちにあわせたらしいしね。」

昨日の印象が、がらりと音をたてて変わった。

「だからいつも一人で寂しそうだね…僕が話しかけたり、そりゃもうテンション

高くて、今もけつこう仲がいいんだよ。」

「澪は前からお茶四系だった?」

「もちろん。噂の印象からは全然違つよ。まあ何度か関節技をやられたけど…」

「まつて慎也。関節技つて…?」

「……」

「ねえ!何でそこまで黙つちやうの!なんか恐いよ…」

「まあ付き合つて損はない。楽しく過ごしてくれ。」

「そこでスルースキルを使わないで!」

僕はこれから関節技に恐怖を抱きながら生活しなければいけないのか…。

「あ、それと澪の大好物はチーズケーキだ、参考にでもしといて。」

そのとき担任の先生がきて、ホームルームが始まった。

今日は將軍が出張のため、部活はなかつたので、くされ縁の部活をのぞきにいった。

総員3名、そして全員知り合いのパソコン部だ。賞もたくさんとつていて、

パソコン部門では、全国一との噂もあるといつ。

「失礼します。」

「おつー風巻ー。」

「風巻先輩ー。」

「…久しぶりね。」

唯一の男子でパソコン部部長の坂本翔。ありがちな名前だといつも思つ。

微妙にかつこいいけどけつとつのナルシストだ。たいがい「俺天才」つていつも

言つてゐる氣がする。実質バカで運動オノンチでアーチオタだ。けれど機械工学と

アニメーション作成は企業レベル。実際就職も決まつてゐる有能なやつだ。

「風巻先輩」と僕を呼んだのは、中学2年生の沫雪莢香だ。ふわふわとした髪で

小柄な彼女は機械修理屋さんの家庭で育ち、彼女自身も修理ができる。

基本なんでも修理でき、しかも僕らに口でやつてくれるのを優しい子だと

感動する。料理も上手でクッキー焼いてくれたりもしてくれた。うれしい後輩です。

おとなしい感じであいさつをしたのは河本真夏だ。実は僕の幼馴染だ。

昔は明るい感じだったのに、今は…

実は彼女は元水泳部だった。種田は百メートルの背泳ぎで、一回だけ

一分〇三と女子中学記録を抜いたことがあるほどだ。その正式なタイムを

とる直前に…事件はおこったのだ。

河本家が襲われたのだ。

親や弟、みんな殺された。真夏をのぞいて。

彼女自身も重傷を負い、泳げなくなってしまったのだ。彼女はひとつもない

絶望と孤独に苦しみ、…つづけに陥ったのだ。

そう、僕が人を恐れて引きこもったようになってしまった。

僕が立ち直った時、彼女も僕に負けじとがんばって学校に行けるようになつた。

けれど昔のような輝きは残つていなかつた。

「そうだ！見せたいものがある。」

「ん？ なに？」

翔はとある大手ネット小説サイトを開いた。

「これは……水泳小説？」

「……私が書いたの。」

「えつ？」

「……一度泳げなくなつた少年が、再起に臨むおはなし。……描いてみたくて。」

「実際、かなり評価が高いんですよ。今は人気トップ10入りなんですよ。」

「すうじいじやん！」

「えへつ……。」

さすがにうれしいのか、照れてるようだつた。

でもそれで真夏は幸せではないだらう。きっとそのうれしさも、嘘かもしけれない。

今でも僕は人が恐くなつて、息苦しくなることもある。

「あたしもこんな素敵なお説、書いてみたいですよ。」

「僕もそう思ったよ。」

それにもしても……この主人公、真夏の写し鏡のようだ。もしかしたら

……真夏は

泳べることをもう一度望んでいるのだろうか？

1・3 アイシのフォトグラフ（後書き）

正直いって改稿作業やつてよかったですとおもっています

1・4 総合水泳大会の日（前書き）

「風巻の着替え写真一枚600円（税込み）だぞー。」

「高っ！しかも男の写真売れるわけが…」

「ドドドドド…パシャ！」「まいどー…」

「…………」

「…なあ風巻。」

「うん…？」

「事態は思ったより深刻のようだ。」

風巻の着替え写真100枚 30秒で完売。

1・4 総合水泳大会の日

総合水泳大会当日の朝、夢見心地のまま目が覚めた。

カレンダーを見て現実に戻される。今日は大会だったな…。

久しぶりに彼女の夢を見た。中学生にもなつて一人で公園のベンチで座つてお話ししたり、

図書館に行っていつしょに本を読んだり、勉強したりして…

彼女との思い出は、可憐な薔薇のように美しく、楽しくもあつた。

けれど花びらが一輪一輪散つていいくように美しい時間は散り消えて、
とげが行く手を阻むがごとく、彼女に触れることなどできなくなつた。

そういえば、この前久しぶりに真夏に会つたとき、少しだけ彼女を
思い出して

しまつたんだ。どこか似たような気がして…。

…ああ、そういえば彼女も水泳もやつてたんだ。彼女は僕に?泳ぐ
?といふことを

教えてくれたんだ。毎日が、毎日が幸せだったのに…。

「どうで間違ったのか、どうすればあのまま幸せでいたれたのか、もう分からない。」

だからこの想い出は、これからもずっと心の奥にしまいこみ、忘れ去ってしまう。

やつして、トーストを口にくわえながら、急いで家を出た。

バス停には、すでに晃弘がベンチに座っていた。

「お、晃弘ーおはよー。」

「風巻か。けつこう遅かったな。」

会場となる他校へは、山の上にあるので、ここからはバスで行くしかない。

僕らはしばりくじてから、到着したバスに乗った。

「ねえ、けつこう窓越しに山の上から景色を見るのって、とんでもなくすばらしいこと思わない？」

「……思ひものかー……」

晃弘は重度の乗り物酔い症だ。飛行機なんて乗ることなど不可能だ
わ。」

「ね、いえば、ちゃんと酔い止め飲んできた？」

「それが朝けつじつ急いでてな…家で飲み忘れたんだ。」

「ええ、ijuで吐かないでよ。」

「大丈夫だ、いつも右足のズボンのポケットに酔い止めが仕込んで
ある。」

そつまうと晃弘は、酔い止めと書かれた箱を取り出した。」

「ち…あれ？」

「ん? どうしたの?」

「実はな……薬をきらしてたんだつた……」

その後、僕の視界は真っ白に染まつた気がした。

「大会当日になんて」としてくれたんだ…。」

「すまんな風巻…処理手伝つてもらつて。」

あの時の絵面は、ひどいもんだつた…。

じまじく歩いて会場となる学校に着いたら、もう澪が待っていた。

「一人ともーー。」

「おはよつ澪、はせーね。」

「今来たばかりだよ。あ、これ食べていいってね。」

澪は箱から、型の果物を出した。

「これは……？」

「スターフルーツ。南国でとれる果物よ。」

それは、とても甘酸っぱく、目が覚めるほどおいしかった。

「これ一発で好きになつたわ。」

「おーしゃー。」

「気に入ってくれた?」

「うん、ありがとつ、澪。」

こんな優しい女の子が関節技行使するはずがない。

今大会はリレーなど団体種目はなく、ただ単に個人種目だけやり通すという変わった大会だ。

すぐ一ヶ月後には一年に一度の町内文化体育大会が開かれることが関わっている。

ちなみにその大会で標準記録を超えた選手は県大会、そこからさらに全国へと駒を進んでいく。

今大会は先がないので、ただ優勝を狙うのみだ。

「風巻せんぱい。がんばってー！」

上からは茨香の声援が聞こえた。どうやらパソコン部が全員で応援に来てくれたらしい。

といつても三人だけなんだけれどね。

「えー、それでは五十メートル自由形男子の部に出場する選手は、それぞれの位置についてください。」

係員の指示により、僕は飛び込み台に立った。

いつもとは違う空氣に緊張を覚えるが、みんなの言葉のまゝが自分を強く支配していた。

「えー、位置について…」

狙いは一つ、優勝のみ！

「よーい！」

「おつかれ風巻。余裕だつたな。」

会場のお客さんは、全視線を僕に向けていたらしく。他の選手など雑魚同然だね。

「さて、ちゃんと会長の出番だな。」

「え？ 晃弘は？」

「おまえが控えのときに泳いだ。結果は三位だった。」

「やうなのか〜。」

「そもそも人生は俺の手によつて断ち切られたいのか。」

あれ？ 率直な感想を述べただけなのに…。

「それよりも会長が、ほら。」

すると、濁が口の上でもつスタートの準備をしていった。

「よーー」 パンー。

やつぱり飛び込み距離は一〇メートルあつた…けど、様子が変だ。

前見たような抵抗のペンギンのような軽やかな泳ぎではなく、力任せで、雑な泳ぎになっていた。

まるでもがくよくな…渦潮から必死ではに上がりついしてこぬよつ

だつた。

結局一位だったのだが、タイムは一十九秒四三と下がっていた。

「なんか…緊張しちゃつた。」

「まあじょりがないよ。初めての大会だつたんだから。」

「…うん。そうだね。」

その後僕らは表彰を受け、整ってもない協会側のあいさつを聞き流して

それぞれの自宅へ向かった。

なお、帰りのバスでもあいつは吐いた。さつきエチケット袋用意しておいてよかったです。

1 - 4 総合水泳大会の日（後書き）

前書きの短編はこれから毎回やへいへいへ。

1 - 5 突然の電話2本（前書き）

「はあ…疲れたな。今日は一日中寝るか…。」

ｐｒｒｒｒ！

「は」もしもし?」

「はい、じゅらは風巻奈於ちゃんのお世じょうつか~。」

「まーまさか…」

1・5 突然の電話2本

翌日、大会休みで家の中にいた僕は、海外にいる我が家の中の最強魔人と連絡を取り合っていた。

「久しぶりね、奈於ちゃん。」

「どうしてこのタイミングで電話してくれるの…。」

話しているのは僕の姉さんの風巻茜しまきあかねだ。

二十一歳で僕がなぜ女子顔になったのか納得できるほど美人なんだけど…

歌がものすごい上手いので、ヨーロッパ留学で歌の修行に出ている。

ちなみに僕も歌は人よりは上手いらしい。僕にはよく分からぬけど。

「姉さんは今どうしているの？」

「私は今、ウイーンで奈於ちゃんよりも若い子供たちといっしょに歌つてますよ。

みんな白い服着ててかわいいですよ。」

「…姉さん、よくそんな子供たちといっしょに歌えたね。」

「私は国際派ですかね。」

姉さんせ口コ「ハリシ」タ「ハリ」、アラ「ハ」（アラギー）ハハレッ
クス）と云々完璧異常者、

もとい変質者だ。そつちの意味ではある意味国際派だらう。

「今さらひと姉さんの悪口を流さなかつた？」

「まさか、そんなことないよ。」

受話器の奥から「ハハハ」という音が聞こえてくるのが幻聴だ。

「そんな」とより奈於ちゃんは、学校樂しんでる?」

うん、昨日は大会で優勝したんだ。

「すう」——い——今すぐ抱きつきに行きたいわ——」

「あなたは子供たちと歌うべきだ！」

ほんとにこの姉は……けれど両親は外国のホテルで火事に遭い、逃げ遅れて死んでしまった。

姉が向こうにいるので、今は実質1人暮らしだ。生活費は姉から一ヶ月に三万円が支給される。

学費は両親の残した大量の貯金から引き落とされるので、なんとか節約生活でやりくりしている。

そのおかげかどうか分からぬが、料理はどうな食材でもおこし
作ることができる。

ただし見た目がひどい。

けれど姉はどんなものでも作ることができる。

ただし材料が食べ物じゃない可能性が高い。

「もうもう、晃弘くんたちとは仲良くなれる？」

「うそ。おかげをまで…」

「ここにいたことをおつかれ迷っていた。でも心配かけるし、妬く可
能性も捨てきれない。」

家に帰つてくる可能性も…それだけは避けたい結果だ！

「どうしたの？」

「いや…その…」

「実は彼女とかできたとか？」

鋭い！昔から妙に勘が冴えているからな…。別に彼女でもないのこ

彼女とこう言葉に敏感になってしまった。

「あ、これはこうですな。」

まあこーー疑惑に変わってしまった！必死で誤魔化しの言葉を考える。

「アハーナのねー… つこに奈於ちゃんこも…」

ああ、 もひーなにか言わないとー僕は「アハ」と訳をした。

「僕はウサギに恋してしまったんだ。」

「アハして言訳がワンパターンなんだろ？。

「アハなの… 宇沙木ちやんって女の子が好きなのね。」

「の姉むじの上なくバカだ。

「ちがう… ウチの学校の生徒会長がアタックしてくるんだよ…。」

もつなにもかも勘違いされたら困るので、 経緯を全部話した。

「アハなの… 楽しそうな子ね。」

「アハ、 そりなんだ… 楽しそうなんだ…。」

「アハ。 じゃあ姉さんさ四日後に帰るとしますわ。」

「…………え？」

「今日はそのために電話してきたんだから。」

ガチャ
ツーツーツー

「最悪だああああ！」

なして！あの姉との共同生活つてひくな目にあわないんだから！

pr
r
r
r
r
!

「はい……もしもし……」

「奈於くん？」

「慎也か…いま落ち込んでる…。」

「澪ちゃんのこと、知ってるんだ。なら話が早い。」

「…はい？澪がどうしたの？」

「うして僕は落ち込むよつ焦りの気持ちで慎也の家にやつて來た。

実は慎也の家は整形外科なのだ。つぐづぐエリート道なのが腹立た
しい。

けどそり思つてこる暇はない。だつて…

五〇五極 「樹雨」

澪は入院したのだから。

「奈於ちやん…」

「（J覧の通りだ。複雑骨折のよひだ。」

そこには、ベッドの上で右足を吊り上げられた澪の姿があった。まさか昨日の…

「奈於ちやんの考えてくる」との通りだと思つ。発端はあのとじや飛び込んだときに
足がつてしまつたの。」

「え？ じやあ骨折は？」

「帰り道よ。わたしは自転車で來ていたから足がもつれてしまつて、
転んでしまつて15メートルほど転がつてしまつたの。」

足がつってもあのスピードは異常だ。よほど負荷がかかつたんだと思つ。

「…奈於…」

すると晃弘が汗だくでやつて來た。

「晃弘も來たんだ…。」

「まさかとは思つたが…」これはしばらく泳げないな…。」

「うん…町内文化体育大会は出られないわ…。」

「慎也。退院はいつできそうなの?」

「一週間以内には出来ると思つけど…澪ちゃんのがんばり次第だね。」

「

「みんな…わたしを心配してくれてありがとつ…。」

すると二人は、

「型フルーツのお礼。おいしかったぜ!」

「澪ちゃんがないと、学校に盛り上がりが欠けるしね。」

慎也はともかく、晃弘が会つたばかりの澪に打ち解けているとは驚いた。

「うひはまだわいりないのに。

「セヒ、少し慎也と話をしてくる。なにがあったのか聞かせてもらえないか?」

「いいよ。『めんな奈於くん、澪の面倒を見ててくれる?』

「うん、いいよ。」

一人は病室を出て行った。つてこれって…

「一人きりになっちゃったね…。」

完璧なるフラグが立つたね、この展開。

「…ありがとう。見舞いに来てくれて。」

「大丈夫なんですか?リハビリも大変でしょう。」

「わたしなら一週間で回復できるわー。」

「ムリはしないでくださいよ。」

「まあ、見てなさい。そういうえば、家でなにかあったの?慎也くんが『奈於くんなんか落ち込んでた。』って言つてたけど…。」

「姉さんが帰つてくるんだ。…変態の。」

「まあ、楽しそうね。」

「あれ……同じ感想だ。」

「へ？」

「姉さん元々のことを暴露せられたら、楽しそうな子ねって……。

「もしかしたら、氣があつのかもしけないわね。」

「もうかもね。」

病室の窓からは、金色の光が差し込んでくる。もう夕方で、空にも赤みを帯びていた。

茜色の綺麗な空が、名前からか姉さんを思わせて、少し寒気がした。

「それじゃ、僕はもう行くね。」

「なにか予定でもあるの？」

「あつますよ……こりこり準備しなければならぬですしね。」

「へえ、『愁傷』だね。」

「あなたにその言葉を言われよつとま。」

「あ、そうだったね。」

「明日もお見舞いに行きますから、じつかムリしないでくださいね。」

「

1 - 5 突然の電話2本（後書き）

ココから猛烈に加速していきます。
明日2話ぶんのせるぞー！

1・6 人についての概念（前書き）

「慎也、さくたんが合宿から帰つたんだって。」

「なかなか楽しかったらしいね。そういえばさくたんからこんなものが届いたのだ。」

「ん？ なにこれ？」

「『奈於ちゃんの似顔絵』だつて、公表許可……」

「わー！ 妙に似てるしやめて！」

いつか公表できたらと…

「へえ～、今日もお見舞いに行くんだ～。」

翌日^{あす}の朝、ものす^ごうい冷やかしの眼差しで見てくるのは、クラスメイトの榎沢^{えざわ}榎^えさんだ。

実は澪^{みずき}の数少ない友人だったりする。いわゆる「ボク少女」のかっこいい女の子で、

かなり女子にモテる。友達の多さは学校の壁を越えるとの噂だ。

「いいな澪ちゃんは、ボクも奈於ちゃんのよつな彼女が欲しいよ。」

「うあんね。僕は男だし、澪は同性愛者でもないよ。」

「あ、そうだね。澪ちゃんは同性愛なんか微塵も興味ないもんね。」

僕が男といふことは肯定しないんだ…。

「でも榎沢さんが入院したら、かなりの人数が見舞いに来そつだよね。」

「あはは。実際澪ちゃんのように骨折しがあったんだけど、

病室に人が入れなくなっちゃって。』

そんな桜沢さんは一年生の時に同じクラスになつたのだ。僕に対しての第一声が、

『きみ彼氏いる?』

なので忘れるはずがない。そして、夏に僕があの自殺事件で引きこもつてしまつたとき、

誰よりも心配してくれたのが桜沢さんだつた。

僕を救つてくれた人々の中でも特に感謝をしている一人だ。

そして二年生でまた一緒にクラスになつたのだ。

「じゃあ澪ちゃんによろしくね。」

「え? 桜沢さんはお見舞いに行かないの?」

「それはだつて……クスツ。」

「え?」

そこで朝のホームルームのチャイムが鳴つた。

桜沢さん……澪と喧嘩でも……してはないよね。

「はは… よりしへおねがいします。」

「うへへ… でも応援してあげるから。」

「冗談ですよ。」

「うひ、 いじわる言わないの～。」

「つまりライバルが減つたと…。」

「うんーあと一週間すれば退院できるけど、もう以前のよいつに速く泳げないわ。」

「元気そうですね。リハビリがんばってますか?」

「失礼しまーす。」

「あー奈於ちゃんー!」

「もちろん、彼女？として、ね」

「はい？」

そういえば僕は、澪の彼氏に“させられた”のだった。

言い換えれば、僕と澪の関係はいつ壊れてもおかしくはない。

僕はまだ澪を彼女だとは言えない状態だ。

恐いのだ。“人”を愛することが、かつて僕は一人の少女を愛したのだ。

それは言葉では表しきれないほどに。ただその愛はもうくも崩れ、大きな絶望を味わった。

僕は再びあの苦痛を味わいたくない。僕は人を愛せない。

けれど澪は僕の？彼女？になろうとしている。それは澪にとって幸福なことなのかもしれない。

けれど澪は、僕の過去を知らない。僕の絶望を知ってはいないのだ。
きっと僕を愛せば、彼女は不幸になる。そして、僕も苦しむだろう。
でも最近変わってきたことがある。みんなと話していると、なんだか楽しい。

かつては“人”と話すことを拒絶してきたのに、今では晃弘や慎也、

翔、莢香、真夏に桜沢さん、

そして澪たち、クラスのみんなとのたわいのない会話がとても楽しい。

そう思わせたのが、澪との会話だった。彼女だからこそ、樂しくさせたのかもしれない。

だから澪を大事にしてあげたいと思つ。

「あ、よかつたらこれ食べてください。」

僕は澪に買つてきたチーズケーキを渡した。

「わあ！私の大好物！ありがとうございます！」

澪はなんの遠慮もなく、食べ始めた。しつとつとしたチーズのクリームが澪の口の中に

吸い込まれていぐ。彼女は「天使」という言葉が似合ひの笑顔を見せた。

「おいしー。ほんとにありがとー。」

なんだかむずかゆかった。人にお礼を言われてもそんなことは今までなかった。

それは不思議な気分だつた。

「ああーおいしかった。ねえ、お願ひがあるんだけど……。」

「なんですか？」

「「」のケーキこれから一切れ毎日持つてきてくれない？」

「はい…？」

「あ、いいの？ありがとう、さすが奈於ちゃん！」

「へ？…あ、うん。じゃあ、お大事にね…。」

ガチャ バタン

いいんだこれで… 露を大事にしてあげないと… ね。

ん？でもあのチーズケーキって一切れ500円だよね？

一切れ1000円×一週間=7000円

現在僕の食費+仕送り残高(小遣い)=7412円

その夜、僕はこれから調味料を主食とした生活に、恐れおののきながら布団に入った。

1・6 人についての概念（後書き）

いつときますけど
1切れ500円のチーズケーキあつたら
教えてください！？

1・7 懐かしきもの（繪書き）

「姉ちゃん、やくたんは新たに“たくみん”ちゃんと交信をとつたらしくね。」

「ううう。メインヒロインに蹴られていたようだな。」

「うわあ…かわいそひ。」

「そんなくみんさんの『無の上鱗』もよろしくお願ひしますね。」

「姉さん、おやつかり宣伝している…。」

「僕のマイページから閲覧できます！見てくださいね！歯みどりがどう…」

1・7 懐かしきもの

目が覚めたのは早朝五時だった。一人用の布団になぜだか窮屈さを感じた。

これから始まる調味料生活に憂鬱さを覚え、落ち込んでいた。

僕の布団の中に下着姿で寝てこる女性がこのひと回りがついたのはそれから五分たつたころだ。

「つよいー姉さんー？」

なぜだーなぜーここーあと二日後じやなかつたのー？

「つよいーあ、奈於ちゃんおはよー。」

「姉さんなんで下着なのー。」

「だつて暑いもん。」

「姉さん…幽霊じゃないよね…？」

「なに言つてゐる奈於ちゃん。世界で一番愛してゐる奈於ちゃんのた

めに、すぐ帰ってきたのよ~。」

吐き戻がりあげてきた。

「はあ…食費が危ないってこのひ。」

「え? 今日は奈於ちゃんが料理してくれるんでしょ?..」

実は姉さんと留学出発前に、『帰つたら奈於ちゃんが手料理を振舞ひ』といつ約束をしたのだ。

僕が引きこもつた時にも姉さんは帰つてきてくれたのだが、料理など出来ない状態だった。

僕は澪が今入院していること、チーズケーキをねだらかいでいることを話した。

「といつわけで食費がどうにもならないんだ。」

「うへん。」

この姉は理解できたのだろうか…。

「…そうね。だつたら…」

だつたら?

「姉さんを一番愛してゐて言つて」

車にひかれてくれたらいいの?』

「冗談。奈於ちゃんの料理を食べたいし、チーズケーキは買つてあげる。」

「え？ いいの？」

「でも今日は私とお見舞いに行つてくれない？」

「別にいいけど……。」

「じゃああの駄菓子屋で待つてるね。」

「うん。じゃあ六時に来て。」

部活が終わり、懶き足で学校近くの駄菓子屋さんへ向かった。

といつても一年前につぶれちゃったんだけど。

5分もたたないうちに着いた。姉さんはまだ着てない。

廃れきった建物を見て、昔はよく姉さんといつしょで遊びに来たことを思い出した。

駄菓子あたりがあつたら白匂しあつたり、夏になるとカキ氷を食べたり、

道行く人に『お嬢さんたち、姉妹かな?』とか訊ねられたり。

彼女ができるからは、ここに行くことなんてなかつたからな……。

「おまたせ。」

どうやら姉さんが來たようだ。白いワンピースにサンダル、この格好でよくここに來ていた。

でも……

どう見ても一十一歳には見えないほど現役学生にしか見えない！

「それじゃ、行きましょ。」

改めて、僕のこの顔は姉譲りなんだな…と皮肉に思った。

慎也の病院は歩いて十五分ぐらいだった。

「慎也くんは元気してるのかな。」

「それがどうかしたの？」

「気になるじゃない、幼馴染だし、恩人でしょ？」

「うん…元気だから大丈夫だよ。」

思えば慎也や晃弘、姉さんにもたくさん迷惑をかけてしまった。

恩返しのためにも、くじけず生きていこう。

「そういうや姉さん。どうしてこつしょにお見舞いなんと言ったの？」

「奈於ちゃんの彼女に会ってみたい。」

「だから勘違いだって…！」

僕らは五〇五室の扉を開けた。

「失礼します。」

「はい…あ、奈於ちゃんーあれ? そちうは…お姉さん?」

「はい。西とこーます。よろしくね。」

「樹雨凜です。高校生でいらっしゃいますか?」

みんな高校生だと思つんだ…。

「あはは。もう大学も出てこますし、この前ウイーンから帰つてきたところです。」

「ええー！それじゃあ……」

一人はとても楽しそうに話し始めた。『』は僕のこの場所じゃないな…。

病室を出たり、慎也に会つた。

「あ、奈於くんお見舞いに来た？」

「うふ。姉さんど。」

「茜さん、帰つてきたんだ、今どじで。」

「澪と話したよ。僕は席をはずしたんだ。」

「わつか。あ、茜さんこよみじへね。」

「うふ。」

そのあと僕は間違えてブラックの缶コーヒーを買つてしまい、茜さんに悶絶しながら姉さんを待つた。

家に帰り、姉さんに振る舞う料理を作り始めた。

『手羽唐』。

これが作れなければ風巻家ではないと云われている我が家の伝統的なメニュー

つてお母さんが勝手に決めたのだ。

僕が唯一見た目も味もよく出来るものだ。

その懐かしい手羽唐を姉さんに食べさせよう。

買ってきた手羽先肉の間接を切り離す。その後にフライパンに広めた

オリーブオイルの中に入れて揚げる。そしてタレを絡めるのだが、

タレはすき焼きのたれを混ぜたものを使用。あれは何でも使える上に

甘みが増すので非常に便利だ。

そして一人分には少し多いくらい揚げて、食卓にあげた。

「約束どおり、作つたよ。」

黄金色に揚がつた唐揚げに、純といえるきれいな茶色のタレがかかつたその姿は、

申し分のないせじおこしをつであつた。

「「いただきまーす」」

やわらかにとろけて、甘辛いタレがほんのり絡み合って、香りとともに極上の味わいがロングに広がった。

それと同時に筆者自身がデジタル。

「ノルマニー」

「おいしいわ。懐かしい味ね。

料理人はこの瞬間をみることが生きがいなんだと言つていいたけど、

その理由はよく分かる。僕は今この瞬間幸せになつた。

「す、」いわ奈於ちゃん！私も負けないくらいの料理を振る舞つてあげたいー！」

僕が姉との共同生活を送るのを嫌がつた理由。それがこれだ。

「まつてーーこれから一緒に作るつてのはじりーー？」

理由は一つ、食べ物じゃない可能性が高いからだ。

見た目は一流料理そのままだが、材料が大分おかしいのだ。

「やうねー。それもいいかも。奈於ちゃんとの料理楽しそう。」

「でしょ？ほ、僕も楽しみだなあー。」

これでこぐらか救われるのなら、仕方のないことだ。

「こつしょに料理だつたら、どんな卑猥なこともしてもいいこのよね
…」

だからいやなんだ。

1 - 7 懐かしきもの（後書き）

なんか「めん。
宣伝入れちゃって。
でもおもしろいですよー

1・8 駆られ、失踪（前書き）

「莢香、さくたんが喜んでこる」とあるんだって。」「なんでしょう？」

「友達のマスクメロンさんの“角でぶつかったのは宇宙人”で、その中のさくたんの一一番好きなキャラの緑紅葉さんが使われていたんだ！」

「へえ～！ ようやくしましたか！」

「そうだね！ ようやく出番が来たね！」

「さくたん、よかったですね。」

「君はなんて優しいんだ…すごいじつでもいいことなの！」

そんなわけで、マスクメロンさんありがとう。

1・8 駆られ、失踪

「僕の安息の世界はどうにあるんだろ?」

「どうしたんだ風巻。えんま様も霞ざめるような絶望的表情を浮かべて。」

姉さんのちゅーから逃れた僕は、少し早く登校した。

「茜さんか…また会つてみたいな。」

「それ慎也も言つてた。」

「僕を呼んだ?」

「呼んでない! ていうかいつ来たの! ?」

「まあね…晃弘。」

「ん? ああ、あれか。」

そして二人は廊下へ出て行つた。なんなんだろ?

「…例のあれは？」

「ああ、ばつちり。ほらよ。」

「おお！かわいい！うまくできるね！」

「だろ？翔と莢香もすごいよな。この写真からフィギュア作れるなんて。」

二人のかすかな話し声からは、ただならぬものを感じた。

ガラガラ

「『めんね、待った？』

「いつたいなんの取引をしていたんだ？」

「……（ポツ）」

「えー？なんで頬を赤らめるのー？なにを買ったんだ！」

まさかあの着替え写真…慎也も買ったのか？

そろそろ人が集まってきたので、自分の席に着いた。

今日の晩御飯はなにしようかと、現役学生ではあまり存在しない考えに頭を悩ましていると、

『ピンポンパンポーン、えー、緊急放送です。』

緊急放送だらうがこのクラスは騒がしい。ざわせりへんな内容じやないしな…。

『三年一組の河本真夏が行方不明となりました。』

一瞬で学校全体は静寂に包まれた。

『昨日の夜、真夏の居候先に、真夏が帰つてこないと連絡が入り、現在職員による

捜索が行われております。場合によっては警察にも行方不明届けを提出します。

また情報が入り次第…』

放送が終わらないうちに、僕は廊下を疾駆していた。

慎也と晃弘も教室を飛び出し、翔と葵香とも合流した。

「真夏が行方不明って……。」

「最近部活にも来てなかつたし、姿もあまり見かけなかつた！」

「あたしは一昨日河本先輩を見かけたんですけど、なんか霸気がないというか……」

「元気がない感じでした。」

全く分からぬ。どうして真夏はいなくなつたんだ？

「とにかく探そつ。」

「先生ー。」

僕らは社会の斎藤先生を見つけた。

「奈於ー慎也、晃弘もー早く学校へ戻りなさいー。」

「見つからないでしょ？ いつしょに探ししますよ。」

先生はやれやれとため息をつき、

「これももつてなさい。新たな情報が入つたら連絡を入れる。」

先生はプリペイドカードを僕に渡した。

「あらがとうござりますー。」

そして学校周辺を走り回つたが、十一時になつても見つかなかつた。

「はい。もしもし。」

『奈於か、一回学校に戻ろう。少し飯はちゃんどらなこと。』

『はい……せうしましょう。』

「はい……うなづく。」

『それで……ん? なに? 田撃情報……?』

「田撃情報ですか!…」

『ああ、どうやら海野原整形外科周辺で真夏を見たという人が…』

慎也の病院近くへまさかとは思つが…

「わかりました! 今から向かいます!』

『あー…ひょっと…』

バ
シ

その考えに確信はない。だが、行くしかないのだ。

「…今から澪に会いに行く。そこに真夏がいたかもしれない。」

十五分後、僕らは病院の談話室にいた。

「河本真夏ちゃんが行方不明……。」

「やつ。澪のところには来てないよね?」

「うん。今日はだれもまだ来てなかつたし……。」

来てるわけないよな……肩を落としていると、

「ねえ坂本翔くんに沫雪莢香ちゃん。最近真夏ちゃんになにか変わった様子はなかつた?」

「うーん……最後に見た時は生命力がない感じでしたけど……。」

「そういうえばこのあいだの水泳大会の応援に行つたとき、なにか違うな顔をしていた気がする。」

「その前はずいぶん險相でパソコンに睨んでいたし……。」

「うーん……生命力に欠ける……虚ろ……。」

澪はどうかの探偵かの「とく考えに耽つてゐる。

でも僕はそれ以前に、今日の澪になにか違和感を覚えていた。

普段の澪の病室からは、水仙の花の香りがしたのに、今日はなんと
いうか…

なにか嗅いだ事のある、懐かしい香りが混ざってたのだ。

こういつのつてたいがい『誰か来ていた』つてことになると澪さんは
だけれど、

ほんとに澪のところにだれも来ていないのか？

「… 真夏ちゃんは、元水泳部だったそうね。」

「はい。」

「さつと、もう一度泳ぎたかったんじゃないの？」

もつにちど、泳ぎたかった…あれ？

「あー…そういうえば真夏の水泳小説！ 真夏の話と酷似していたような
…。」

「ならなおさら、さつと市営プール、もしくは学校のプール
にいのと思つ。」

学校にいるはずなら、今頃見つかっているはずだ。

ならば市営プールにいる確立の方が大きいと思つ。もちろん、あて
にならない勘なんだけれど。

「なら、今すぐ向かいます！」

「あ、あとね、実は真…」

澪の声は、僕が廊下を駆ける音で消されていった。

市営プールはここから少し距離があるので、バスで移動するのが常識的なのが、僕は走っていた。

理由は、バスのダイヤが今の時間にあってない」と、お金を持つてないからだ。

それでも僕は、自分でもおどろくくらい速く走っていた。

両足にズキズキとうなりをあげていた、けれどそんな意識も忘れるほど、無我夢中で走っていた。

どうして僕はここまでして真夏を見つけよとしているのだ？

もつ自分でおかしいと思つ。けれどなにか嫌な予感がするのだ。

早く見つけないと、天罰がくだりそうだ…

気がついたときには着いていた、どれくらい長く走ったのだ？

今日は営業していないのだが、外から入る事が出来る。

柵を乗り越え、敷地内にあるベンチに腰掛けた。足がいたい…ここ

にも真夏はいないのか…

それを最後に、過労によつて僕の意識はそこで途絶えた。

ふと、懐かしい香りがしてきた。なにか嗅ぎ覚えのある、あたたかい香り…。

あの病室でも感じた香り、水仙の香りと混ざっていた香り。

思い出そう。思い出そう。その香りはなんなのか。

その香りは僕に何をもたらしたのか。

想像の世界が広がつていく。僕はだれかと手をつないでいる。僕はその子と笑いあい、泣き合い、励ましあつたりしながら。この気持ちは懐かしい、彼女と過ごした…彼女と？

そうだこれは…彼女の香りだ！あの病室の香りは、彼女のものだつた！！

彼女の手が離れていく！彼女は真っ逆さまにおちていく…！

「奈於…？」

ふと目を開けると、制服姿のセミロング女子が、僕をまじまじと見つめていた。

「…真夏！？」

1 - 8 駆られ、失踪（後書き）

僕は緑髪が大好きなんだい！

1 - 9 人が恐い（前書き）

前回のあらすじ

なんかありがちな打ち切りエンドだったよね。

1・9 人が恐い

「奈於… じつじて…?」

「真夏…、ビルに行つてたんだ。」

「私は…泳ぎ…」

「どうやら澪の考えは的中していた。けどなぜ今セリフ。

「なんで泳きたくなつたんだ…?」

「…大会で奈於たちの泳ぎを見て…もうこちど、泳ぎたい衝動に駆られたの。」

「…そり。」

「……」

「…なんで家に帰らなかつたんだ?」

「…ビルで泳ぎの練習したかったの。」

「じつして僕たちに言わなかつたんだ…?」

「だつてあこづらがなにしてくるか分からな…から…」

「あいつら？」

「最近ストーキングしてくる男子生徒が数人いて、手紙をたくさん送つてきたり、私がだれか男子と話すと、その男子がぼこぼこされて帰つたり…。」

真夏は美人さんなのでそれ相応モテるとは思つ。

でも病み上がりで、ここまで陰湿な行動をすることは最低だと思つ。

「…それで目立たないよう一人で…。」

「うん…。」

「…で、今日は泳ぐのか？」

「…うん。」

「…うん。」

「…うん。」

彼女はそそくさと更衣室へ入つていった。

「…それじゃあクロール25メートル計つてみようか。」

簡単なウォーミングアップを済ませた後、タイムを計ることにした。

彼女のプールでの姿は、とても懐かしい。彼女はあのとき一際目立つていた。

中一にして、全国へ行つたことも大きい。あのときと比べて真夏は、
霸気がなく、

元気な印象が薄れてしまった。

「それじゃ、いくよ。」

「…オッケー。」

「よーい、ドン！」

バシャン！としづきをあげ、彼女はどびこんだ。

スタートは悪くないしむしろフォームもいい。なんだ、泳げるじゃないか！

真夏の特徴であるフォームのよれも、昔とはわりに変わらなくてよかった

見えた。

タイムは17秒1。

中学生では充分に速い。

「泳げるじゅん真夏ー！」

「……」

あれ？ 黙つちやつた… 悪い」と言つたのかな？

「… こんなのは私じゃない… 私じゃない、私じゃないーー！」

僕に向けられた田は、鷹のように鋭く、烈火の如く赤く染まつてい
た。

「水が鉛のようだ重くて… 世は空氣みたいにすり抜けてく感覚だつ
たのに…
空を飛んでいる、そんなものだつたのに…」

「久しぶりに泳いだのだから、仕方ないよ。」

「そんな言葉で片付けられる程度じゃない！」

さつきまでの控えめな口調とは逆に、激昂に触れ、怒りと悔しさに目を真っ赤に染めていた。

「だいたいあんたにはわからないでじょ。あなたはこの学校で誰よりも速く泳ぎ、私のような者を差し置いて、いい気になれるものね。」

「いい気になつてなんか…！」

「言ひ訳しないでー優勝なんてして平然としたものを…」

真夏の口から放たれるナイフは、鋭く心に突き刺さつてくる、

僕は復活を手伝ってくれたみんなのために、全国へ行つて恩返しをしようとして、

ここまでがんばってきた。けれどそれが真夏を拒絶へと示すものとなってしまった。

「…どうせ、あんたに私の苦しみなんて、分からんんだよ…。」

(一)

頭の後ろを鈍器で殴られたかのような衝撃が走った。

(利香…)

思い出したくもない台詞が、過去から引き出され、僕の脳を染め上げていく。

わからない

わからないんだよ

どうせわからない。

同じような境遇をたどった物語の主人公がいたけれど、僕はその主人公のように強くなつていこう。

そう思つていたけれど、過去とは決別できない、それは無理だ。

真夏が死んだ利香に見えた。そしてあの香りが鼻を通つてくる。

ああ、踏んだり蹴つたりだ……

腕時計を確認してみると、確かに六月十七日となつてゐる。田畠

「やあ、田畠君、起きたよ。

「奈於く、一田中氣絶してたよ。

まだ口が暮れていないう微妙な空がかかっていた。さういふ感じは田畠の病室の中で寝ていたようだ。

「繩ヶ原のことをやけ籠

「まあ？ 慎也？」

「あ、起きた。

は十六日だったな…。

ぼくはそんなに眠っていたのか。

「いきなり飛び出したんで、あとを追つてみたら、真夏ちゃんはつ
なだれ、
奈於くんは倒れてたからびっくりしたぞ。」

「じめん…。」

「気を悪くするな。幼馴染だろ？ 必死になるぞ。」

「やついや真夏は？」

「昨日」「ひ」でゆっくり休ませて、今は普通に学校へ通つてる。」

「やつが… よかつた。」

「そんなことより、なにがあつたんだ？」

「真夏があのこに見えて… もういないの」「。」

「あの」「まさか神谷利香か？」

「うん…。」

神谷利香かみやりか プールのスライダーの登場口、頂上てっぺ一〇メートルの高さ
から

落ちていった、僕の…大切な人だった。

『どうせ私が苦しんでいるの、分からぬよな。』

僕に最後に語つた言葉は、冷ややかで残酷だった。

「思い出してしまったのか。」

「……」

僕はなにも言葉を発さず、涙を流した。

彼女の死により、僕の情緒不安定は一気に加速した。

彼女が僕に残した言葉は、人間というものの恐ろしさという根をはる、

一生倒れることのない巨木と化した。

そしてその言葉に支配された僕は、人という人を拒絶した。

けれど少しずつ、少しずつ人の温かさに触れ、自分の弱さに気がつき、

みんなに支えられて、どうにか立ち上ることが出来た。

みんなも先生を僕を気遣ったのか、どうも遠慮がちで、穏やかに接してくれた。

けれど晃弘や慎也、桜沢さんは、いつもどおりに接してくれて、この上なくうれしかった。

そして慎也に真夏のことを見たのは進級したての十日だった。

真夏もまさか僕と同じ境遇にあつていたとは知らなかつた。

その日から、パソコン部に入りするようになり、真夏とたくさん話した。

昔の明るい印象は感じられず、魂が抜け落ちてしまつたようだつた。

でもだんだんと口数が増えていき、笑ってくれる回数も増えていった。

自分はもう、人と普通に接することが出来るんじゃないかな。

もつ過去とは決別できたんじゃないか。そう思つていた。

けどそれは、单なる幻想にしか過ぎなかつた。

どこで道を踏み外したのか分からず、精神状態の行く末をさまざま自分がまだいた。

そして真夏の逆鱗に触れた。

ああ、僕の罪は報われるのでしょうか。

どうしたら、だれも苦しまず、人と接することができるのでしょう

か。

自分は日に日に、人を好きになつていきました。

けれど昨日、人の恐ろしさを痛感し、恐ろしさに意識をも失いました。

ああ、もう分からぬ。

僕はやつぱり人を好きになれません。

1 - 9 人が恐い（後書き）

シリアルですね
はりつめていいです。

1 - 1 - 0 企画部、始動（前書き）

「だりやあああ…」
「うわあーあなた誰ですかー？」
「ウチは神谷葵。たくみんのほつで世話になつたる。「すみません、わたしは河合桃です。今回まじめに遊びにきました。」
「神谷さん河合さん? よろしくお願ひしますね。」「よろしくな、あとウチは神やから親切にしな。」「…は?」
「は? とせなんやー女子のくせに生意氣やぞー。」「僕は風巻奈於で性別はれつきとした男だー。」「でも女子の面前やないか。」「つるひ(殴)

「まったく神に無礼やな。」「…まあ、たくみんさんのなん神を、よろしくおねがいしますね。」「自分、けつこいつ腹黒やな…。」「…死にたいな。」「光一なぜ出てきたしー。」

いつかコラボ短編作りたいです。

次の日の朝、まだ気持ちが落ち着かないため、まだ僕は病院にいた。でも正直、学校へ帰りたかった。みんなと笑って過ごしたい。人を恐れながらも、自分は人を恋しく思っている、

矛盾してるな…

ふらふらと廊下を歩いていると、この病院とは似つかない明るい声が響いてきた。

「奈於ちゃん！」

澪だ。やつぱり元気だな。

松葉杖をもつてこないが、もうすぐ退院できそうな雰囲気だ。

「昨日チーズケーキ持つてこれなくじめんね。」

「いいの。あ、でもね、茜ちゃんが持つてきてくれて…昨日もおこしくいだきました」

「え？ 姉さん来てたの？」

「うん。奈於ちゃんのお姉さん、優しいのね。」

ほんとは重度のド変態なんだよ、とは言えなかつた。

いや…信じてもうれしいし。

「でもあまり食べ過ぎると、太つてしまりますよ。」

「いやああーそれ気にしてるのでハビリ毎日がんばってこるんだから。」

「がんばってくださいね。僕もそれもう戻りますから。」

「あ、昨日のことは慎也くんから聞いたけど…大丈夫？」

「あはは。もう大丈夫ですよ。」

「ほんとこう悩み相談はこの生徒会室でまかせなさい…。」

と、肩をたたかれた。

「や、そのときは、よろしくお願ひします…。」

なんだらか、すこべ頼りがいがありそつだけど、

肩がメシッて音がした気がする。

夕方、「風巻さん？」

と、看護婦さんが僕を呼んだ。

「風巻さん宛てに、手紙が届いてますよ。」

「え？ そうですか。ありがとうございます。」

だれからだらう？

ラズベリーの花絵がついた封を切り、内容を見てみると、

明日の夜18：00に光鳴湾中に来てください。

話したいことがあります。

くれぐれも内密に。

真夏

え？・真夏！？

約束の時、僕は複雑な気持ちで学校へ向かつた。

なぜ夜に、学校へ呼び出したのか、目的がなんなのか分からぬ。

真夏は僕に対して、どんな感情を抱いていたんだろう？

嫉妬？怒り？ああ、わからない。

倒れた時、最後になにか言つた様な気がするけれど、

正直何を言つたのか覚えていない。

そして、ようやく学校に着いた。

心臓は、妙な鼓動を奏でている。

…それでも、覚悟は決まつた。

僕は意を決して、正門を通過した。

すると…

「…？」

僕、晃弘、慎也、翔、莢香、そして真夏。

簡単にいえば、真ん中にランタンがあって、周りを照りしている。

なぜか澪もいて、二人で円になつて配置されたいすに座つてゐる。

「えー、ここに集まつてもうつたのは、真夏ちゃんのためよ。」

「と、こいつ？」

「我々二人は、これから発足する“企画部”において…」

「え？ それは某アニメにてぐる『風巻、活動は似ているが、こ
こでそれを言つたら死刑だ。』

「企画部はまだ非公認団体だけど、今回の企画の行く末次第で、正
式に認めもらひつもつよ。」

「どんな企画なんですかあ？」

「すばりそれは・・・『真夏ちゃんを全国大会へ出場させる会…』
よー。」

「ええー？ 全国…？」

「でももつ真夏ちゃんは怪我を回復してゐる。つまり不可能ではな
い。」

それに市の大会まで一ヶ月はあるし、それまでに必死で練習すれ
ば・・・」

「それは真夏ちゃん次第よ。それを企画部が全力でサポートするの。」

「

なるほど、真夏の劇的復活の裏舞台に徹するわけか。

「私はもう泳げないけど、水泳部のマネージャーに申請しておいたから、

私と風巻くん、水野くんを中心にサポートしてもらひたいとなるわ。」

パソコン部は、また他の学校の情報や、水泳に関する情報を集めてもらひうわ。」

慎也くんは、集まつた情報や、現在の状況を整理してもらひうわ。」

「なにかあつたら、声をかけてくれ。」

す…す…ご…い。澪の発言力といい、指示の与え方はとても尊敬に値するものだ。

生徒会長はやつていてる」とだけはある。

でもそんな会長についていているみんなもす…ご…い。

「…やついつわけで真夏ちゃん、がんばつていい…」

「…まい。みなさんあつがとつぱりこます。」

「…ここが元気はないが、うれしそうだった。」

いつって、企画部の初めての仕事がスタートした。

1 - 10 企画部、始動（後書き）

がらつと急展開。

企画部はこれから大躍進するのかなあ？
あとたくみんさんのなん神も
見てくださいね！

1・1・1 やつてきた刺客（前書き）

「そつこや奈於。ちくたんが塾に行つてな。」

「うん。」

「たくみんとマスクメロンの間の席に運良く座れたんだと。」

「それで？」

「授業中たくみんからこんなものが渡されたんだ」

「なにそれ？」

「紙切れなのが…『やつぱりなおちゃん大好きだ~~~~』」

「うわあああ、翔！そのふざけた幻想をぶちこわす！」

「天才の俺を殴りつけるつもりか！？」

「そこでも天才言つのかー！？」

「ごめんね。マジで笑えたからね。」のめつセージ

集会の解散後、僕は澪を病院まで送る道中、真夏のことについていろいろ話した。

「ストーキング？」

「うん。 真夏が狙われてるらしいんだ。 なにか知らない？」

「… そういえば、なにか怪しい、非公認団体があつた気がするわ。

「え？ 何ですか？」

「確か“Love Summer Club”簡単に言えば真夏のファンクラブといったところだら。

それはひととん海好きやらうのクラブなのだろうか？

いや…まだそれであつてほしいんだけど

「生徒会ではクラブの仕分けとかやつてるんですか？」

「一応やつてるんだけど、年に一回しか行えないし、苦情が来てないと審査できないのよ。」

「わうか…まあはストーキング犯を見つけなこと。」

「そうね～…まあ、わたしに任せなさいー。」

「ほえ？ なにか秘策でも？」

「まあ、いろいろ考えておくわ。」

そして病院にて、僕たちはそれぞれの場所へ帰つていった。

「おはよっ、晃弘。」

「ああ、おはよう……。」

週明けの月曜日、晃弘は浮かない顔をしていた。

「いや、僕も浮かない気分だ。」

「明後日、テストなんだよな……。」

「ここ最近、部活が無かったのもそのせい。」

僕は療養中に、少し勉強した程度なので、ほんとに勉強しないとまずいと思っている。

「なあ、風巻は英語得意なんだっけ？」

僕は英語と音楽が得意なのだが、この『写真やろう』は本物のバカだ。

だけどあいつ、美術だといつも100点取ってた覚えが…

「うん。どうかした？」

「『』の受け身の問題なんだけど。」

問) 次の文と同じ意味の英文を（ ）の部分を主語として答えるさい。

Manaka is loved by (me).

「過去分詞とか分かりにくいんだよ…。」

僕は英語、音楽しかとつえが無いので、ここはきつちり答えとかないど。

「これは、『I love Manaka.』が正解だと思つ。」

…あれ？

ガラガラ！

「そつかそつか、きさまがわれらの諸悪の根源か。」

さつそつとマントをはおつた怪しい集団5、6人が教室にやってきた。

「だれだおまえらー。」

晃弘がのせられてる、めんぢりな」ひた。

「我らは“Love summer club”もとい河本真夏大好きクラブだ！」

これがあの非公認クラブー？ていうか完全にストーカーだ！

「あなたたちストーカークラブが、僕らになにか用ですかー？」

「ストーカー言つな」ひ。

はうーまた思つたことが口に出ちゃつた！昔からの悪い癖なんだよな…。

「わざわざがさひを聞いたことを聞きつけ、調教しに来たわけだ。」

「せひを聞いたこと…あー晃弘なんてことしてくれたんだ！」

「俺のせいにするなーそもそもこの問題が悪いー。」

ちくしょー！…僕は文部科学省に文句を言える立場はないといつのこと。

「ああ、といつわけで我が部屋に来てもいいおひ。」

「えーいやだよー晃弘を連れて行つてー。」

「なんでだー用があつたのはわざまのほうだろー。」

「2人ともきやがれ、晃弘とひやうは口封じだ。」

「ぐつ……」

「晃弘！僕を睨まない！僕のせいじゃないからねこれ！」

「つして僕らは見事に縛られ、連行されてしまった。

このストーカー…邪悪なオーラをものす」く感じじる…。

「…ボソボソ。」

ん？なにかつぶやいてる。

「…せつた的に卑猥な田にあわせてやる…」

だれか助けて。

1-1-1 やってきた刺客（後書き）

時間が無いので今日は短めです。

それにも奈於ちゃんはほんとに女子扱いですね。
自分でキャラ絵作ったけど、かなりの美少女になってしまったことについては別の話だ。

1・1・2 松葉杖はある意味凶器だ（前書き）

「あれ？」
「迷いましたね…。」
「ん？ あなたたちは誰でしょう？」
「はい？ あ、誰かと思えば女の子か…。」
「だれかガスバーナー持つてきてください。」
「はやまるな！ おれは天音龍也だ。」
「妹の、天音夢羽です。」
「あれ？ たくみんさんとこの…。」
「そうなの。どうやらここに迷い込んでしまって。」
「…あなたたちはどんな世界をつくりしているんですか。」
「それがたくさんの人々のやつ、教えてくれなくてさ。」
「…はあ。」
「そんなことより君みたいなかわいい女の子が、どうしてここにいる？」
「…お義兄さん？ かわいいだなんて…。」
「僕は女の子じゃないんですよ…？」

そんなつもりはなかつたんだ。

1・1・2 松葉杖はある意味凶器だ

「『まから』の腐女子に制裁を加える。」

「女子じゃない…僕は男だ…」

もつだれも僕を男として見てくれないよ…おちこじでました。

「風巻奈於、真夏に対して愛の言葉を公言したために、不純同性愛として重刑の処す。」

「まつて…ビ…にもレズ要素入ってないんだけビ…？」

「あたまが男子でなかつたことを幸福に思え、異性愛だつたら死刑だつたのだからな。」

命は助かつたけど社会的に殺された気がする。

「ん…処刑方法ねえ。」

もつ命の保障もなさそつだ。

てこうか晃弘はなにをしてる?

僕と同じところにいるけど、声も聞こえないなんて…

「……！（んぐーー）……！（んぐーー）」 手足口も縛られる

「めんな。僕よりもひどい目にあつてたんだね。」

「…決めた。」

「はい？」

「わやまの上半身裸を学校新聞にて掲載する刑を行使するー。」

「こいつ完全に僕を社会的に抹殺する氣だ！」

「だれかーー！」

「バン！」

鉄の扉が思い切り開かれたのは叫んだ直後であつた。

「奈於ちゃんをいじめるのはやめなさい！」

「だれだおまえはー！」

そこには松葉杖を両脇にかかえた…

「わたしは光鳴湾中学校前期生徒会会長兼公式活動団体審議委員会

生徒代表、樹雨澪よ！」

澪だつて！ ていうか自己紹介長い！

「なに！ 我らを否定する卑劣な悪党か！」

「卑劣なのはあんたたちのせいよ！ 真夏ちゃんに手をだすに限らず、奈於ちゃんにまで手をかけるなんて！」

「へんなやつだ。」これが真夏を愛してやうて書いたんだ。」

「それはわたしが遠まわしに言わせたのよー。」

「？」

「臺灣の文化は日本の文化だ。」

「晃弘くんが見せた問題は、わたしのお手製なの。真夏への愛を公言してしまえば、

「くそ、我々をのせておいて、侮辱までするとは……。」

「さあ、みんなを解放しなさい！」

「ふふふ、やあ今までのおまえならあきらめぬといひだつたが…」

そうだ！ 靜は昨日退院したばかりだ。これならやせられたいほうだいでは……？

「まあせせせ」の腐女子をぶつ殺す。」

「うへええー結局僕は死ぬ運命にー?」

「アゴシ

松葉杖がストーキング犯の腹に突き刺さった。

「…んなつ！」

「奈於ちゃん！その松葉杖を渡して！」

「う、うん。」

「「ぐおおおー部長のかたきー。」」

澪に松葉杖を投げると、華麗にキャッチし、剣の「J」とく操り相手に立ち向かつた。

「はあー。」

片方の松葉杖だけを軸にし、すきも見せずに蹴りをもかましていく。

てこうか…強い。

「奈於むちゃん！ボクのところまではやく逃げてー。」

「つて梶沢さん、なんで！」『へへへ』

「澪ちりちゃんのお手伝いだよ。今のうちはー。」

「させらるかーー！」

「そー！一人隠れてたな！」

シユツー

「ぐお・・・」

梶沢さんは延髄チョップで相手を抹殺した。

ていうか、この学校の女子はバケモノか…

澪は部員を全員ボロボロにして、晃弘を連れて戻ってきた。

「あー、せこせこした」

「で、あのクラブがやつかるの?..」

「部員全員処刑で、クラブは解散ね。」

その処刑は、きっとあつらが僕にまでついたことよつ惑わし
いと懸ひ。

「あ、ありがと?.. いろいろ。」

「ここ。それにセクハラなんて犯罪よ、かよわい女の手にむかっ
て...」

..... - ?

「あれ?..どうかした?..」

「さりばだ!..」

「え?..まつて奈於ちゃん!..」

「奈於むりやーん！」

「……ん？ 風巻つ？」

「すみません、精神的疲労がとんでもないことになってしまったのでどうか休ませてください。」

「は、はあ…ベッド使つていいからね？」

保健室、じつにここが安息の地となってくれ……。

「じゃあ、お簿こひつひから休んでね。」

「あ、はー。」

えーと、僕の名前は…

今夜は枕をぬらして寝ることになりそうだ。

1 - 12 松葉杖はある意味凶器だ（後書き）

ははは、もう保健室でも男子として扱われてねえ
天音兄妹はいつ出番が来るんだろう？

1・1・3 弾けとんだペーパー（前書き）

「……うつだ。」

「ねえ、奈於ちゃん？なにおけいんでんの？」

「桝沢さん、僕は男の子だよね？」

「奈於ちゃんはみんなのアイドルだからね。」

「なんで言葉を濁すの！？」

「…でも奈於ちゃん、男らしきシーンに出くわした」というあるの

？

「…ない。被害者役がおおい。」

「ボクも男の子扱いされている氣がするんだ。」

「…そうか。」

「…そうだよね。」

なんだろ？死の予感がする。

1・1・3 弾けとんだペーパー

なんとか姉のおかゆで田を覚ます」とのできた僕は、期末試験に臨んだ。

これでも僕は受験生だから、成績はとっとおきたいのが現実だ。
でもスポーツ推薦の話もきいているので、どうなるかは微妙なところだ。

…それにしても。

「国語だめだなあ…。」

テストが返ってきたのは、週明けの月曜日だった。

「よーし、一気に返すぞー。」

こんなに採点早いのってすごいことなんじゃないかとつぶやく渺み。

風巻奈於

国語	23点
数学	62点
社会	78点
理科	59点
英語	98点
音楽	97点
美術	86点
保育	64点
技家	56点
総合	623点

振れ幅でかずぎ…むしろ100点取りたかった。

僕が最も苦手なのは国語だ。

古典と漢字しかとれない、なぜか現代国語がなにひとつ分からない重傷者なのだ。

ちなみにこの学校の一番難しい教科は英語と技術家庭科だ。

とくに技術家庭科にはだれもが苦しむ。まあ例外が身近にいるんだ
けど…。

「晃弘ー、どうだった?」

「はつはつは、残念だったな風巻。」

「ん? なにがあつたのか?」

「ふふふ…それがな、貴様に2教科も勝つた気がするのさー。」

「さあ、マッチ棒になりたいならついておいで。」

「つるわせいーこれをみろー!」

水野晃弘

英語	理科	社会	数学	国語	24点
4点	3点	4点	5点	13点	13点
8点					
総合	技家	保体	保体	美術	音楽
280点	4点	12点	12点	100点	31点

「なにー。」

美術で負けるのはいつものこと、仕方ない。

けどこのバカに国語で負けるなんて…。

「あれ? まさか本当?」…

「おお、 そうと今奈於くんはまじつた感じで。」

「国語は今回難しかったよね。」

「うう… そういう人はけっこいいんでしょ?」

「ん? まあよかつたかな。」

「ボクは悔しかつたけどね。」

海野原慎也

英語	96点	国語	91点
理科	100点	数学	97点
社会	92点	社会	92点
総合	854点	音楽	95点
		美術	89点
		保健	98点
		体育	96点
		技家	96点

樺沢 樺

英語 理科 社会 数学 国語

9
1
点
8
7
点
9
9
点
9
1
点
9
7
点

総合 技能 保育 美術 音楽

8
4
6
点
9
3
点
9
8
点
9
4
点
9
6
点

僕の意識はふつとびそつだつた。

1-13 弾けとんだペーパー（後書き）

時間がないので今日は切り上げ。（8月23日）
明日は続きを書いていきます

1-14 リレーメンバー（前書き）

「…本格的に死にたー。」

「ははは。たくみんさん元愛の生日を喰らひつたからー。」

「…僕はどうしたら幸せになれる?。」

「今一番幸せだと思つよ。ボクや凌ちゃん、晃弘くんに慎也くん、翔くんに葵香ちゃんに愛されてるんだから。みんな味方だよ。だから胸張つて生きていー。」

「…うん、ありがとー。」

「そんな奈於ちゃんに朗報があるんだだけ…。」

「ん?」

「実はあくたんが、たくみんさんに奈於ちゃんの…」

「あああああー…」

「…気絶しちゃつたよ。」

「えー、それでは400メートルメドレーのメンバーについてだが……。」

テストが終わって採点が気になる日曜日、久しぶりの部活で

将軍の口からはリレーメンバーの話が語られた。

「樹雨濤は不慮の事故によりマネージャーに転向、かわりに河本真夏が入部したことは

みんな知つてることだとは思つが……。」

それは部長の天川勇人が部員全員に連絡を回したので重々承知のはずだ。

さすがに濤は自転車でこけたといふことはプライドが傷つくらしく、

不慮の事故つてことを要因にしたっぽいけど……

「本来なら今までの評価、タイムから選手を選出することになつてゐるが、

部員の入れ替えが激しいので、1週間後、タイム測定を行うことにした。」

ざわざわ……となつたが、このことも企画部が手をまわしたことだ。

さすがに他の部員にはまだまつりぬけていた。

「のんな手の込んだことをしたのは、真夏がコレーメンバーに選ばれるようあるため。

かなりのアラシクがある彼女にとって、時間稼ぎをしたかったのだ。
もううん僕らの田標は…

「みんな、選手となつて全国を行へじとを田標とし、必死に泳ぎに取り組むよ。」

真夏といつしょに、全国へ行くことだ。

「真夏は背泳ぎをやるんだよな？」

「…うん。これからがんばる。」

「真夏ひやーん…がんばって。」

「澪はのんきだな…。」

「…でも彼女は泳げない。泳きたくても…」

実際どうなんだらう~はじめは僕とわざわざ同じ部活になるために
転部してきたと

思つたんだけど、泳ぎたいとか…そんなことは歎んだりしないのか
な?

「あ、将軍来た。今日のメーラーはまきつねだな…。」

「がんばりうね奈於。」

不思議と、真夏は明るいを少しはじけてる風に思えた。

「今日泳いでみて、どうだつた？」

久しぶりに2人で道を歩いたと思う。小学校以来かな？

「まだもつひとつと慣れるのに何時間かかると思つけど……なんとかなるかな。」

「…僕たち、メンバーにはいれるといいね。」

「そうだね。」

僕たちは互いに大切なものを失った同士だ、それでも青空のしたで笑い合っている。

まだ過去の決別はできていないけれど、こうしていると幸せ者なんだなと思う。

「それじゃ、明日もがんばるね。」

「うん。じゃあね。」

真夏と交差点で別れ、しばらく歩いていると、

「まつで～。」

松葉杖をかたかたと鳴らしながら、澪がやつてきた。

「ちよっと、危ないよ。」

「平氣、もう慣れたり、やるやうにねともねむひぜよ。」

たしかにこの前は松葉杖で敵を倒したけれど…

「それよりも真夏ちゃんと2人で帰っちゃうなんて～。」

「どうかしましたか？」

「いや、ちよっと妬こちやつた。」

「別に毎日こっしょに帰つてないでしょ？」

「うんうん。真夏ちゃん、君とこねと離せやうなんだもん。」

「へ？」

「ありがと。奈於けやん。」

いつたこどりこづれとかよく分からなかつたけど、

あまり詮索はしたくなかった。

そのあとテストの話などいろいろ話をしても、家へと向かった。

家へは一本の大きな坂を上つていく、学校へ行く時には下つていく
んだけど…

そこは春になると桜並木となつてとてもきれいな道で有名なんだけ
ど、

引きもつてた僕はすっかりそんなこと忘れてた。

大きいマンション前の交差点、そこが別れの道だった。

「じゃあね。奈於ちゃん。」

「さよなら。」

「ただいま。」

「おかえり奈於ちゃん。そういえば慎也くんからお届けものが来ましたよ。」

「え？」

すこし大きめのダンボールが、くすんだフローリングの上におかれていた。

えー、どれどれ

差出人 海野原慎也 風巻茜様 風巻奈於様

「つて姉さんも入つてるよ。」

「あれ?ほんとだわ。」

「とらあえずあけてみようよ。」

びりりつ

あれ、手紙と...寝袋?なにこれ?

「とらあえず...姉さんこれ...」

「なにかしらね？開けてみるわ。」

いそいそと姉さんは中のものをとりだしている。僕は手紙を見た。

風巻茜、奈於さまへ

なにかとお世話になつております。

奈於くんはお元気でしょうか。

実は僕も風邪をこじらえてしましました。体調管理は気をつけましょうね。

なんとか奈於くんのフイギュアに癒されながら、徐々に回復しています。明日は学校来れそうです。

「までまでまで！僕のフイギュア！？」

そういえば前に作つてつて言つてなかつたっけ？あれは本気だつたのか！？

さて本題です。今回僕の友人に頼んで茜さんへの帰国祝いの品を送ることにしました。

抱き枕ではありますが、喜んでもらえれば幸いです。またどこかで僕をお見かけするようなことがあれば、

声をかけてください。いろいろお話したいです。
それでは、突然のお手紙、申し訳ありませんでした。

「あー！奈於ちゃんの抱き枕！かわいい～。」

その晩、僕は猛烈に落ち込んで料理などできなくなつた。

1・14 リレーメンバー（後書き）

13話の前日のお話でした。

抱き枕は定番もの。あとは…メイド服？
きるタイミングあるのか？この小説に？

第2期ならできるかも

企画部案 最終雑談宣告

「第一回、小説方針新興会の開催へ。」

「つて、企画部全員で集まつてなにを……」

「これからこの小説の進行方針を新興するためこそ、今日は集まつてもうつたの。」

「せつげなくしゃれていたけど、これはおもじりみだね。」

「つて慎也？ これのせいにおもじりみがあるの？」

「要するに、あくたんを裁く余地もあるわけだ。」

「ああ、なるほど。」

「本日はスペシャルゲストに、桜井ちゃんにも参加してもうつてるわ。」

「

「ボクだよ～。よろしくね。」

「わい、翔くん。例の発表を。」

「ああ、つこにオレにも出番が来たか。」

「こからせつておはじめてよ。」

「わかった。さて、みんな、この小説に旧作があったのは知ってるな?」

「もちろんですよ。風巻先輩が男の子だったときですよね?」

「英香?僕はまだ男だよ?」

「なぜこれは改稿されたのか?さくたんの意図とはなんだったのか?」

「それは風巻を女子にしたかったからだね?」

「晃弘。あとで倉庫に行こう。」

「半分あつてるが、本来はこれは学校に提出するものだつたんだ。」

「

「要するに自由研究なのよ。」

「でもな……さくたんは……他の宿題に全く手をつけず、塾へ行きっぱだつたりネットサーフィンしてたりと、バカやつてたりしてたわけだ。」

「つまりは……?」

「つまらぬままのペースでは間に合わない」ととなる。

「Bノートも2日で3分の2やつてたな……提出日がいつまで。」

「だから明日から…一気に2、3話ずつ投稿される」とことなる。」

「ええ…？」

「これはかなりハイペースだよね。」

「なので読者のみなさんには、新鮮なおはなしをたくさん見れる」と
になる。」

「PVも多分あがりますよね？」

「やつかもな。まあ今までやほりてた罰だな。」

「ふーん…なるほどね。話はそれだけかな？」

「いや、あと一つある、それについては莢香と桜が発表してくれる。
とりあえずオレさまの出番は終わりだ。」

「はいはーい、坂本先輩にかわって莢香と、」

「桜だよ~。」

「あたしたちからはですね、写真のおはなしです。」

「え? それは俺の写真か?」

「いや、君のはちょっと投稿をついかな…ちがつよ、ある『写真を、ボクたちが公表してもよことせぐたんが言つたから、それの話だよ。』

「『写真つて…どんな？』

「実は……“風巻奈於の浴衣絵写真”なのですよーー！」

「なんて」としてくれたんださくたん！？」

「さくたんのブログ、“作者のもじこじ煙 作・作者”にて、明日の21：00から3日間

期間限定公開します！絵は下手ですが、かなりの美少女ですよーー。

「さくたんのマイページからサイトへは移動できます。感想あればコメントもよろしくお願いします。」

「ごじょうでーす。」

「ありがとうございます、葵ちゃん、そんなわけで、これからもこの小説を

よろしくお願ひしますね。」

「もう嫌だ…」

1・1・5 企画部の集会（前書き）

「樹雨澪です！実は前書き初登場です！よろしくねさて、今日21：00にさくたんのブログにて、奈於ちゃんの[写真]が3日間限定で公開されます！さくたんのマイページより“作者のもろこし畑 作・作者”です！みんなよろしくね。」

「僕はどうしたらいいんだ？…。」

「ふああ、おはよつ姉さん。」

「おはよつ奈於ちゃん。」

今日は水曜日か… 最近は時が過ぎるのが早いと感じる。

楽しい時間ほど短く感じるものだけれど、最近は学校が楽しくなつていつてゐる気がする。

真夏も日を増すことに速く泳げるようになつてきたり、順調だ。

僕は姉さんと朝食を作り、とせつでもしないと大変なものが出来上がるから…

材料・味付けは僕が用意し、姉さんは調理担当とすれば、見た目も味も完璧なものとなる。

これを姉弟愛とこつたやつは満身創痍にしてやりたい。

「わつにえば… 私は今日出張に行つてきます。」

「出張? 今どつか勤めていたつけ?」

「違うわ。某テレビ局のビジマン大会に出るために東北へ行つて

あります。

帰つてくるのは明日の夜中になつたわね。」

「のどじまえ… 日曜日の放送だよね？」

「ちがひわ、特番よ、今日の夜に生放送の番組。」

「ああ、あれか。つて姉さんこいつのまにホントやー…？」

「まあ見てね。精一杯歌つてくれるから。」

「わかった。がんばってね。」

「うさ。ね細^{ハラメ}よなつへね。」

「はこせー。」

「おはよー。」

「おはようつる弘。」

今日も[写]真を眺めて「る変態は、密売の成果を報告した。

「真夏ちゃんは出したとたん売れ筋大幅アップだね。すごい数売れたよ。」

「ていうか儲けはどうしてんの?」

「一部は機材、あとは貯金だ。俺はプロの[写]真家になりたいからな。」

ふざけてこるよつた商売だけど、売り上げを夢のためにためてこる、

晃弘はやつぱり芯はまじめなんだな…。」

「ちなみに真夏は売り上げ第4位だ。」

「へ?・トツツは?」

「3位は桜だ。女子からの売り上げが多い。2位は生徒会長さまで。1位は…ダントツでおまえだ。」

みんな、頭おかしいよ？

「ん？ 今ボクの名前を呼んだかい？」

「桜か。写真の話だ。」

ちなみにこの写真屋は桜沢さんも知っている。でもお得意さま限定と言つていただけど、

生徒全員の存在を知つてゐるんじゃないかな…？

教師も気付いていないとか、かなりの鈍感か？ だと思つ。

「やっぱり奈於ちゃんのは売れるんだね。美少女つていいよね。」

「僕が美少女つてこいつのはおかしいし、桜沢さんのほうが美少女だよ。」

「あはは。なかなか言つね。」

正論を述べただけだと思つたが…。

「今の会議、会長が聞いたりどんな反応するんだろう…」

へへ…

今日は職員会なので部活は自主練なんだけど、

企画部に真夏、桜沢さんもなぜか来て、緊急集会を行つた。

「はじめに、桜ちゃんにも企画部に入つてもう少しごとにになりましたー。」

「よひじくね。」

とこつか前からいつもおかしくはなかつたと思つた。

「さて、水泳部はみんなリレーメンバー田指してがんばつているけど…」

400メートルメドレーリレーは、バタフライ 背泳ぎ 平泳ぎ クロールという順番で、

種目に1人、100メートルずつ泳ぐというルールだ。

バタフライは、部長の天川勇人くんが1番候補だ。

僕はクロールが最速記録なので、よほどのことがない限り選ばれないことはないと思う。

背泳ぎは真夏になんとか入らせたい。割とこの泳法は苦手とする人が多いので、

なんとかなるかもしれない。

問題は平泳ぎだ。実は晃弘よりも速い人が何人もいる。所詮は僅差なのだが、

落ちることはおおいにある。

「理想は、部長 真夏 晃弘 奈於 という順番なんだけど……。」

「晃弘の泳ぎをビデオに撮つたものを見たが、無駄に手に力が入りすぎていると

オレは思う。抵抗が結局大きくなるから、足のほうに馬力をかけたほうが

いいと思うのだが。」

「あと最近は、みんなのタイムがおちてきています。そこをねらい目として、

これからがんばってみてはとあたしは思います。」

「あと真夏の状態について教えてくれ。」

「タイムは25メートル背泳ぎは17秒だったよね。」

「17秒！？まさか短期間で17まで上げるとは…。」

「今も上がりつづけてるんですよね？」

「…うん。」

「17のままのペースでいくと…13秒、おそらくはこけるだらうな。」

「

「がんばってくださいね。河本先輩！」

「オレも応援してるから。」

「…みんな、ありがと。」

「さて、これで確認はとれたわね、あとは個人のがんばり次第、話はそれからよ。」

「うん。がんばってこう。」

「ああ、にしても腹減ったよ…。」

「そういうえば、みんなはんつて自分で作つてたりするのかな？」

そうして、集会は雑談へと成り果てた。

「わたしは一人暮らしだから、料理は自分で作つてるわ。」

「え？ 靜って一人暮らししなんだ。」

「うん。腕には自身があるの。」

「ボクもけつこう作つてゐるんだ。なにかと作れると便利でしょ？」

「でも莢香のクッキーは、ほんとに上手かつたぞ。」

「ああ！ 僕も一回だけ食べたことがあるけど、ほんとにおいしかったよねー！」

「風巻先輩、ありがと！ やりこなす。また焼いてきますね。」

「ほんと優しい…人は莢香を見習つべきだ。」

「やつじえぱ、風巻つて姉さんが今いるんだろう？」

「うん、でも今日は出張でいないんだ。」

「出張？…まあいいや。料理は作るのか？」

「うん、まあ上手くはないけど…。」

「えー？ 奈於ちゃんの料理か～。ボクも食べてみたいな。」

「いきなり静が食いついてきた…嫌な予感。」

「奈於ちゃんの料理か～。ボクも食べてみたいな。」

「奈於くん、今日姉さんいないのなら、振る舞つてもいいんじゃないかな」

いかな？」

「あたしもたべた～い。」

「奈於の料理か…お手並み拝見だな。」

このナルシストは料理できるのか？

「ねえ～今日は奈於ちゃん家に泊まつてもいい？」

たしかに一応一軒家なので、泊まれることは泊まれるんだけど…

料理は、アレを振る舞うしかないのかな…。

1 - 15 企画部の集会（後書き）

さあ、強化週間1日目！
果たして更新できるかなあ？
不安だらけだ

1 - 16 振る舞われたもの（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃんの絵が公開中だとさ

結局企画部全員で僕の家に行くことになった。

集会が終わった後、アレに必要な食材を買って、7時に僕らは集まつた。

ピンポン

「失礼するわね。」

「やあ、奈於くん。」

「ほんとあがらせてもらうとは、悪いな。」

「いいよ。一人だし。どんどん入って。」

「おじやましまーす」「おじやましまーす」

「んでも風巻。何を作るんだ？」

「とつじへんを使ったものだよ。」

「へえ、実はボクも食材を買つてきたんだ。ボクも作つてもいいかな？」

「梶沢さんも？ いいよ。」

まさか梶沢さんも作つてくれるなんて、気がきくなあ。

「奈於くん、僕も手伝つてもらつてもいいかな？」

「慎也も？ いいよ。もしかしたら冷蔵庫の中も使つてもいいよ。」

「慎也くんもが…やつぱりのときが来たのね。」

「ふつ…おまえには負けたくないからな…。」

なにが始まるんだ。

「できたぜ……」

「ふう……久しぶりに本気を出したわ……。」

鉄人料理対決なみの熱いバトルを繰り広げた彼らをよそに、僕は淡々とアレを揚げていった。

「僕は海老のアボカドサラダ。」

「ボクはかぼちゃの煮つけだ……。」

なにげにいい前菜だと思つ。

「どうちもおこしやうですか。」

「じゃあ奈於ちゃんに悪いけど、先にいただいちゃいましょう。」

「……いただきまーす。」「」

みんなは先に食べ始めたか……早く作っちゃおう。

「じゃああたしさかぼちゃいただきまーす。」

「どれもおいしかっただな。」

「あーこのサラダすごくおいしい！タルタルソースつてまさか自家

製…？」

「まあこれくらいしかできなかつたから。」

「桜のかぼちゃも甘くて最高…。」

「あはは。喜んでもらえてうれしこよ。」

そして僕も、仕上げにレモン果汁をかけて、調理を終わらせた。

「できたよ～。手羽先の唐揚げたくさんあるからね。」

「これがメインディッシュか…！」

「輝いて見えます！色も綺麗ですね～。」

「まあか奈於がここまでできるとは…。」

「まあ今日はけつこう力を注いだからね…。」

でも今回はけつこう力を注いだからね…。

「じゃあ改めて、いただきまーす。」

「「「いただきまーす。」」」

「奈於ちやん…す」いわ。」

「なんだか自分のかほちやが空しく思えてきたよ…。」

「…おじしいわ。」

僕の唐揚げは、大好評だった。

「ははは。よかった~。」

やつこんば、今田の生放送に姉さんが出るんだって。

トレーディをつか、チャンネルを合わせた。すると…

『では次の挑戦者は、風巻茜さんです。』

ちゅうひ姉の番だった。

「うわ… 椎ちゃん、トレーディ出でしゅ…。」

「出張トレードだったのか…。」

『椎ちゃん、今回の意気込みは?』

『はー、世界で一番愛してんやんのため、精一杯歌いたいです。』

いきなり問題発言だと思いつ。

『弟さんですか。ちなみに弟さんはここに?』

『いいえ。家で見ていてくれてます。早く帰つてあげてちゅーしてあげたいです。』

「風巻。こんな夜中に外出たら、補導されるわ。」

「放して!この姉を今すぐ殴りに行かないと!」

羽交い絞めにされて動けない…帰つてきたら撲殺だ!」

『それでは、曲田を。』

『オペラ座の怪人より“シング・オブ・ミー”で。』

『え…?あれってオペラだよ…?』

『そんなんにする?…?』

会場も一気にざわめいた。今まで普通にして・P.O.P.だったのに、急にオペラになるなんて、

けれどもかのどよめわかは、一気に興奮と歓喜に変わった。

クリスチーヌが音楽の天使より授けられた歌声が、

今姉の口から響いているようだった。

その歌声は人々を癒し、心のなかを綺麗にしてくれるようだつた。

その圧倒的実力差で、姉は見事に優勝し、

賞金200万円入ったと聞くまで、僕らは終始啞然としていた。

1 - 16 振る舞われたもの（後書き）

なんとかのせれました。
では僕は宿題と戦っていきます！

1・17 とびだせ新聞記者（前書き）

「あ、エ、エ、エ、うわーん」ひはー。

「ん？あなたはだれかな？」

「たくみんさんの『無の片鱗』でお世話になつてゐる

ナワフ・ミウリコです。

きよ、今日は本物の奈於さんを見に来て…」

「あー、ボクは桜沢桜なんだけど、奈於ちゃんね、今うつなんだ。」

「そ…そ…うですか…す、すみません、おじやまして…」

「あはは、かわいいね。でも奈於ちゃんに興味あるんだ…。」

「ち、違うんです！でも…わたしより…か、かわいいですね…。」

「君を越すかわいせなんだ…すごいレベルだね…」

たぶんみなさんが思つてこいる以上に桜さんもかわいいこと思つ

「ただいま。」

「お…おかえり、姉さん…。」

畠口、姉さんは晴れ晴れした表情で帰ってきた。

「おめでと…か」かったよ。」

「奈於ちゃんのことを思つて一生懸命歌つたわ。」

新聞のエンタメ記事には、姉さんの脅威の歌唱力について堂々掲載されていた。

「200万円はかかるの？」

「やうね…今度『はんでも食べに行かない』？」

「うそ、やうだね。」

姉が活躍してくれると、なんだか僕もうれしくなった。

姉さんの生活も、いつも料理を作るのと、多少卑猥なことをされるのを除けば

楽しいものだ。

「人は寂しい、だから」の生活がこれからもずっと続けられますように…

「おはよう。」

「あ、ああおはよう。」

「へ..ビラした晃弘?」

あの日以来、僕が教室にくると必ずよめかれる。せつと姉さんの「」と思ふんだけど、

別に僕あまり関係ないのに…

「おまよ～奈於ちゃん。お姉さんは帰ってきた?」

「うん。おじこうれしあつだつたよ。」

唯一桜沢さんはこつもと変わらぬ態度でいた。

「奈於くんおはよ。今田も暑こよね。」

慎也も…うう、君たち優しく…

「やうこえは晃弘。真夏との自主練さびつ。」

リーメンバーになれるか危うい2人を夜に室内プールで泳がせて
いる。

澪もついていてたと思つ。

「けつこいつ頑調。真夏も速くなつてきてるし、いかるかもな。」

「せう、よかつた。」

「甲後田の田耀田だよな?」

「うそ、がんせうわ。」

部活も無事に終わらせ、帰つてみるとなんだか人だかりができるいた。

僕の家の前で。

「なんの騒ぎだらう？」

テレビカメラにマイクを持った人…どうやらマスクのようだナビ。

「これは家に入れそうにないな…。」

裏口から行くか…と、わざと裏へ回ろうとした…

「あの、すみません。風巻茜さんのお知り合いですか？」

新聞記者っぽい人が話しかけてきた。どうやら姉弟だと気付いてはないらし。

「お知り合いですけど、なんですか？」

嘘はつきたくないかったので、一応知り合いといふこと。

「茜さんはふだんどういった人なんですか？」

「こじで変態とはいえないし、いいイメージの返答をしてみよ。

「綺麗な方ですね。学生に見えちゃつほど若くして、憧れです。」

「せつですか、実は昨日西原さんが殴られて動けなくなつた際に、

瞬時にカメラ壊して優雅に去つていつたんですよ。」

なんてこいつた。

「なにしてこの姉さん…？」

「え？お姉さん？」

あ、まずい。

「わよなー。」

「あ、まつりぐださー。あなたは西原さんの…」

出来ることなげの記者の記憶をぶつとぼしたかった。

「ただいま…」

「あら、おかえり、大変だったね。」

「見てたんだ…。」

「姉さんを綺麗だなんて……照れちゃうわ。」

お世辞だとほんとも言えない。実質綺麗だし。

「カメラ壊したの……？」

「違うわよ、あまりの人の多さに壊れちゃつただけよ。」

姉さんほどの能力なら、簡単そうだけど……

でももっと深刻な問題が生じてしまった。

「僕が弟だってばれちゃつたよ……。」

「別になにもおかないと黙つわ、それにばれてないと黙つわ。」

「え？…どうこういって…」

「まあ明日分かるわ。」

次の日の新聞。

『美声の天使の弟は妹だった！？』

おかしいと思う。

1 - 17 とびだせ新聞記者（後書き）

新聞ネタね……射命ま／＼
がんばつて夜にまた更新しますね。

1・18 メンバー選考

運命の日曜日、プールは鬪氣で満ち溢れていた。

『いよいよだね…』

『平泳ぎ… 入つてみせる。』

『俺は神だ！ 崇めるがいい！』

『ああ、Jの写真可愛い…』

Jの部活はいろんな意味でおかしこと思つ。

「では諸君。早速400メートルリレー選手選択審議会（つまりタ
イムが速い選手選べばかー）

を始めようと思つ。」

（）はほとんどに必要なのかな…

「風巻、なにか文句でもあるかね？」

「めつそつむ！」ぞこません。」

どうして将軍は僕の心の中を読み取れるんだろう？

ちなみに400メートルリレー選手選択審議会は、自分が選択した泳法を

100メートルを競泳し、いちばんの選手がはれてメンバーになる。

バタフライは2人候補、背泳ぎは2人候補、平泳ぎは4人候補、クロールはなぜか僕だけだったので、僕はもうメンバーになつた。

まずはバタフライ、天川勇人と桐生通雄だ。

まあ…勝敗は目に見えてるんだけどね。

「よーい　パン！」

「まさか通雄、自爆行為か？」

通雄はバタフライがいちばん得意と言つていたけど、部長のバタフライは

すべからず速い。市内でも入賞しまくっている。

まあ、勝てるわけないよね……。

「勝者、天川勇人。」

これで次は背泳ぎだ。真夏と、原田麻紀。原田さんは背泳ぎで最も速い人だ。

今の真夏だとどうなるかな…

「よーい」パン！

麻紀さんはスタート直後、バサロで差をつけた。多くの選手はこのバサロを使う。

だけどね…真夏にそんなものはいらない。

「え？ 追いついてる？」

真夏の特徴であるフォームと抵抗の少なさは、この1週間で大きく成長した。

まだバサロはできないけど、充分に戦力になる！

ターンのたびにバサロで差をつけられるが、すぐに追いつき、

またバサロ…でも勝利は近かつた。

最終ターン、真夏のスピードは原田さんのバサロを越していく。

「勝者、河本真夏。」

皆は驚いていた。たつた一週間でリレーに出られるものではない。

けれど彼女は成し遂げた。並ではない努力だったと思う、それでも、

「泳ぎたい」の一念でここまで来れたんだ。すごい。

「やったね真夏ー。」

「うん。みんなのおかげだよ、ありがとう。」

真夏はこれ以上ない笑顔を見せてくれた。

「それでは平泳ぎの測定を始める。」

残りは平泳ぎだ… 晃弘、がんばってくれ！

「1番、金井良助」

「よろしくお願ひします。」

「2番、伊藤癒李」

「よろしくおねがいしますー!」

「3番、森川正人」

「ああ、はい、よろしくおねがいします。」

「4番、水野晃弘」

「よろしくお願ひしますー!」

「それでは、位置につけ。」

いよいよ勝負のとき、Jの日のための一週間はとくに大変だった。

僕らは全国へ行きたい。それもいままで信頼を分かち合つた仲間と。

そして、スタートの火蓋が切って落とされた。

「よーい　パン！」

1 - 18 メンバー選考（後書き）

まさかの打ち切りエンド…
時間がなかつたからね。

1 - 19 変わり果てし関係（前書き）

先に行つておくと、かなり真剣です。

『400メートルリーメンバーとマネージャーは直ちに会議室に集合せよ。』

将軍からの召集、作戦会議と聞いたけど。

「それでは、全員集まつたな。メンバーの確認をしよう。
まず、マネージャーの樹雨濤。」

「はーい。」

「クロール代表、風巻奈於。」

「はーい。」

「バタフライ代表、天川勇人。」

「はーい。」

「背泳ぎ代表、河本真夏。」

「…はい。」

「そして平泳ぎ代表… 金井良助。」

「はい。」

ほんとうに接戦だった、けれどコンマ二秒及ばなかった…。

「いいか、諸君は学校の代表として出陣することになる。メンバーに選ばれなかつた人、他の生徒の分までしつかりとやることだ。それではミーティングをはじめよう。」

晃弘はほんとうに落ち込んでいた。あれだけがんばったんだ、悔しいに決まってる。

だけど測定の畠田、ほんとうに驚いたことがあった。

「おー風巻おはよー。」

「え? わ、おはよー。」

あれだけ落ち込んでいたのになかったことのよつて気でびっくりした。

「え、やられたの? 畠田は……」

「負けたもんはしょうがなーじゃん? 現実には逆らえないからね。ソラポジティブに生きていかないと死んでしまうー。それに[写真があるし]… おまえのな。」

「晃弘、君への信頼が一気に崩れた気がしたよ。」

でも笑えなかつた。どうもムリをしてこなよつた

ちゅうじつと見苦しかつた。

「晃弘くんの様子がおかしい？」

家に帰った僕は、姉さんに相談した。

「なんか無駄に明るいっていうか…どうしても悔しさを表に出しきれない感じだった。」

「それは…まずいわ。」

「え？」

「自分の感情に正直にならずに逆らって、自分を追い詰めていると思つ。」

きっと心からものを言えなくなる…人形のようになってしまったわ。」

「

人形と聞いて肩が揺れた。僕もひきこもって人形のようにならなくなつたから。

「僕のよつて……なつねやつのかな。」

「いや……なにい」と本心をこねぐらなくなると黙り込む。

「それじゃあ晃弘は……」

「まだ大丈夫だよつたさ……わいね。今度晃弘くんの家に行つてみま
しょい。」

「え? なんで?」

「なにかね……嫌な予感がするの。」

「ねえねえ晃弘。」

「ん? なんだ?」

「今度や、泊めてくれない?」

一瞬、晃弘の顔がこわばつたのは氣のせいかな?

「あー… 今度聞いてみる。といひでなんでだ?」

「姉さんがまた出張だし、家に記者がたかられるのも困るしね。」

「なるほど… わかった、聞こへおべ。」

「うそ、よひしへね。」

「そう……ねえ。」

「ん？」

「もしかして、家でなにかあった？」

すると晃弘はたじろいた。なにか恐ろしいものを見たかというような

「それはない……といつかどうじて?」

「いや……なんか浮かない顔してたから。」

「や、そつか? すまんかった。」

「いいよ、悩みは誰にでもあるだらう……あ、そういうえば今日カウンセリングの日だった。」

「あれ? まだ行ってるのか?」

「もうしちゃうくね。」

僕は月に一回カウンセリングを受けている。まだ少し安定してないしね。

「分かった。将軍には俺が伝えとくな。」

「頼むね。」

やつぱり…なにかおかしいな。

晃弘が家のじとであんな顔になるなんて、普通じゃない。

…なにか、気にかかったからか、僕の足は晃弘の家へと向かっていた。

カウンセリングの先生には、あとで電話で謝ろう。

晃弘の母さんにためと、プリンを買つて、晃弘の家へと向かった。どこにでもあるような普通の一軒家だ。

ピンポン

「すみません、風巻です。」

「風巻くんー?…今行くねー!」

ガチャ

「すみません、突然の『訪問』で。」

「久しぶりね、どうしたの？」

風邪なんてひいてないよつに見える…全然元気じゃないか！

晃弘は嘘をついていたのか！？

「すみません、お聞きしたいことがあります。」

「なに？」

「晃弘くんの、家の様子を教えてくれませんか？」

「もしもし姉さん？」

「あ、奈於ちゃん。どうだった？」

「どうやら家でも様子がおかしいみたいなんだ。無駄に明るいって……。

「

「うふ。すぐ行くね。」

ガチャ

「うう……それじゃあ、こましう。公園で待ってるわ。」

午後6時半前、僕らは公園に出会い、ある場所へ向かったのだった。

ピンポン

水野晃弘の家に。

「あれ？ 風巻くんに… 茜ちゃん？」

「すみません、上がらせて下せこ。」

「え？」

「『めんなさい。晃弘くんのお母さま。』

「ええ！ ひよ、ひよっと！」

僕らは急いで2階へと上がった。晃弘の部屋は…

「晃弘！」

ドアを開くと、そこは悲惨な状態だった。

破られたノート、カレンダー、紙ぐずが床に舞つており、といろど
ころに

赤い斑点があつて…

まさか… 血？

晃弘ははさみを逆手にもつていて、といろどりに切り傷があった。
はさみには赤い液が滴り落ち、カーペットに染み付いている。

彼はつづりな表情を浮かべ、こちらを見た。

驚愕した、なんなんだこの顔は！？

絶望にまみれた、生きていのとは思えない顔。これは晃弘なのか…?

「さやあ！ 晃弘くん！？」

「姉さん！落ち着いて！」

「なにがおこつて……！ 晃弘！？ なにしてるの…」

なにって、なにも

- 1 -

二二七

· 十四
·

あまりのシニッケに気絶してしまった。そこには地獄絵図たる

すると、どたどたと足音が聞こえてきた。

はあ……はあ……やうはうそうたつたのね。

卷之三

「今はそんなことどうでもいいわ。それよりも奈於ちゃんは、救急車を呼んで。」

「これら晃弘といえども、メンバーにはいれなかつたくらいでこんなになるのかな？」

でも僕はもつひとつ気がかりなことがあつた。

「どうして澪は…『晃弘の家』？」
「様子がおかしかつたから、マネージャーの仕事として追つてみたの。
おかしなことになつてたなんて…。」

自分の息子が、あんなに豹変してしまつたから。
晃弘のお母さんは意識は戻つたけど、それとつ落ち込んでいた。

「はあ…どうしてあの子が…」

それは大げさだし、普通に落ち込むへりこだと思ひながり…

「まあ、なにがあったのかね…」

すると、1人の人影が見えた。あれは…

「真夏？」

でもなにか様子がおかしい。

もしかして、泣いている…？

「晃弘くん…どうして、約束が守れなかつたからって…」

「真夏！約束つてなに？」

ハッといきなりを見た真夏は、とつとう泣き出しちゃつた。

「どうしたのー？」

すると、震える声で、じりづぶやいた。

「わたしね…晃弘くんと付き合つてるの…。」

1 - 19 変わり果てし関係（後書き）

今日は文章長めのこの一話。
明日は3話載せたいです

1 - 20 これからが眞の戦い（前書き）

前回のあらすじ

昨日たくみんさんには於うちやんの絵をあげた。

「晃弘と…付き合ってるだつて？」

「…うん。」

談話室に移動した僕らは、真夏の話を聞いた。

「実際はまだ付き合つてないんだけど…ある約束をしたんです。」

「約束？」

「そういえば約束が守れなかつたからとか…

「それはどんな約束なの？」

「俺らが全国へ行つたら、告白するつて。」

胸がズキッとした。彼はメンバーにも入れず、約束をこの段階で達

成できなかつた。

それが苦しくつてしょうがなくて…あんな真似を…。

「それじゃあ、晃弘は真夏が好きだつたのかな。」

「でも気になることがあるの。」

「なに?姉さん?」

「どうして全国へ行かないと、告白をしないのかしら?」

「あ…確かに。」

「それは…」

「それは俺の両親が反対しているからだ。」

「晃弘!大丈夫?」

「ああ、もう平氣だ。」

「晃弘くん…」

「俺の親は真夏と付き合つけると反対している。真夏は事情が分か

つてるだろ?」「

「うん…わたし、つにもなって、親もないから、信用できないつて…。」

すると晃弘のお母さんが、申し訳なさそうに口を開いた。

「「めんね…私はほんとうは賛成してたの。だから…お父さんがどうしてもダメだって…つに暴力までもふるわれて…こっしょに反対するしか…なかつたの…。」

「知つてた。痣があつたし、時折悲しそうな顔をしてたから、夜中におきてみたら…。

俺の父さんは暴君だ。普段は優しいが、気に入らないことがあると酒が入り、暴力を振るつ。

でも翌日になると誠意をもつて謝つてくれるからよかつたんだが…今回ば、あつそつだ。だから俺たちは全国に行って、たくましくなつたら告白するつて

言つてやつた、すると泣りながらも、認めてくれた。」

「だから…あんな有様に…」

「くそ…俺は弱い…弱すぎる…こつしょに全国へ行ひつひつ練習したのに、

こんな結果になるなんて…悔しい…悔しきらい…。」

ありつたけの感情を吐き出しつつ、晃弘は呻いた。

運命に敗れ、もう道を閉ざされ、取り残された者のように、泣きく

まるよひこ、

まるで… もう死ぬしか道が残されてないよひこ…

「よく本音を吐き出してくれたわね。」

姉さん…？

「晃弘くんはずっと本音を抑えていたから、自分自身が壊れてしまうところだったわ。」

私は奈於ちゃんを見てきたから、人の心の影がどんな影響を『え
るか、よく知ってるの。』

晃弘くんは、これから戦わなくちゃならないわ。あなたのお父さ
んと。

自分が大会に出る」とはもうできないけれど、晃弘くんのおかげ
で全国へ行つた！

と言われるようなサポートをすれば、十分に通用すると思つわ。』

失敗をし、墮ちた天使に光を差し伸べる女神のよひこ、姉さんは優
しかつた。

「晃弘くん…これからもよひこしくね。」

「よかつたわ…茜さんはずいこです。」

「晃弘くん、『めんね。母さんも戦うわ。』

「晃弘、がんばってここのな！」

「みんな…ありがと。」

晃弘から流れた一滴の涙は、とても輝いていた。

そうだ。これからが真の戦いなんだ。

僕らは、晃弘の分までがんばって、全国出場を果たすんだ。

1 - 20 これからが真の戦い（後書き）

さて、そろそろ終盤に入りますね。
今日はあと2話のせたいです。

1 - 21 囚われの少女（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃんの絵は、今日の21:00に渡し飛びます。

1 - 21 囚われの七夕

事件があつたのは七夕の7月7日、来週の土曜日に大会を迎える、大事な1週間前だ。

昼休みに、坂本翔が慌ただしくやつてきたのだ。

「おい！奈於！大変なことがおこった！」

「ん？ 翔、どうかした？」

「晃弘と真夏が拉致された。」

「ええ！？」

たしかに今日は晃弘は来てない。熱が出たって聞いてたけど…

「どこのいる！？ 2人はどこのー？」

「今英香と調査中だ。」

「へーー。」

「あ、どこのに行くー？」

「どうしてこんなときに限つて！というか犯人は誰だろうか？」

昇降口を飛び出して、校門をくぐった。すると…

「おまえが風巻奈於か。」

ロープを持った普通の男子生徒2人が立ちはだかつた。

「なぜ飛び出してきたのかな？まあおおよそ察しあつて居たがな…
くくく。」

「晃弘と真夏のことか。」

「はーーーそのとおりや。案内してやるよ。ただし…開けりせんか（殴

「ふう、危なかつた。」

「あれ？ 慎也？」

「あやまあ… おれたちのじやまをしやがつ（蹴

「あつたぐ… 勝手に飛び出したら怒られぬよ~」

「桜沢さんも…。」

「ヤリのナメクジさんたち、晃弘と真夏をビームにやつた？」

「勝手に探しとか…「ぐづーーー？」

「教えない」と、ボクなにするかわからなによ~。」

桜沢さん、笑顔でそつまつとす“い恐いよ？

「市営プールの……監視室……」

「ありがとう、それじゃ、おやすみ。」

「な……ドサツ

……おやうしじゃね。

「それじゃあ、行こいつよ。」

「へ？」「うん、行こいつ。」

2人とも……無事であつてくれ！

バスに乗って市営プールまで来た僕らは、柵を乗り越えて監視室へ向かった。

ちなみに今日は水曜日の定休日なので、人はだれもいないはずだ。

「監視室はたしか室内プールの方だよね。」

「正門はしまっているから、裏口のまづからいくしかないね。」

「正門は鍵がかかっているから…あれ？」

「南京錠が、ついてない…？」

もしかして、と思い、ノブを回してみると、

ギイ…

「開いてる…。」

「行こうつー奈於くん！」

「うん。」

と、廊下を疾駆していくと、

「大勢でやつてきてくれるなんて、うれしいねえ。」

と、かなりがたいのいい2人が行く手をせざつた。

「あんたたち、なにもの？」

「雇われたんだよ。おまえらを排除するために。」

「雇い主はだれだ！」

「ははは、監視室にいるさ。」

「奈於くん！ どいて！」

すると慎也はドロップキックをぶちかました！

「奈於ちゃんは先に行つて！」

と、桜沢さんも応戦して、道は開けた。

「あ、わ、わかった！」

2人は苦戦しているようだ。それをよそに、僕は走った。

監視室に入ると、パイプの上に紙切れがおいてあった。

『おぐの扉、倉庫にて待つ。』

ここは倉庫と直結している。そこからはなにか不穏なオーラを感じられる。

意を決して、扉を開いた。

スポットライトに照らされ、晃弘と真夏は縛られて、ぐったりしていた。

イエスが貼り付けられ、これから処刑が行われるかの」とべ。

「おやおや、まさかあんたから来てくれるなんて。」

聞き覚えのある声……だれだつけ？

「くすくす……くすくす……。」

「誰だ！ 誰なんだ！」

「忘れたのか、おれたちはおまえらに復讐するんだ。松葉杖の恨み

は晴りでしかも「一.
」

「松葉杖！まさかおまえらは僕を拉致した！」

2週間前、真夏をストーカーから救うために、僕はのせられてこいつらに捕まつたんだ。

「あのときのストーカークラブ部長！」

「ストーカーいうな！まあいい、その口もじきにふさいでやる。」

「なんで2人を捕まえたんだ?」

「分かるだろ？ 付き合っていたんだよ！だから死刑だ。」 真夏は生かすが痛い目にあわしてやるー！」

卷之三

「しかし、今回の悪々しに会長は来ないわ。」

漆のこと?』

おまえ名義でケーキを贈つて置いてやつた。毒入りの、な

L

毒入りのだつて！？

「…」れでおまえが毒をいたしたことになり、社会的に死んでもらおう。
もううん…」

ばたん！

「身体的にも、痛めつけてやる。」

「……なぜ、おまえいらぬにまでして真夏にこだわるんだ？」

「……なぜって？……はは、はははー…忌々しいんだよー…幸せそうこうして
いるやつが！」

「おれたちはなあー…家族いねえし恋人いないー…不幸な連中さー…真夏
もそんなやつだろう？」

「仲間にしてやりたかったー…けどよー…あんたらのせいで幸せそう
になりやがった！」

「だからみんなまとめて不幸にしてやるー！」

「…………」

「こいつらは僕らは幸せだと思つてこらる。たしかに僕らは幸せものだ。

けれど…その幸せをつかむまでは、本当に苦難の道を歩かないと
けない。

どんな状況になつても、逃げずに立ち向かえば、幸せなんぢやないか？

ここからは逃げている。人を道連れにしようと/or>する。

「……僕は」

「ん？」

僕は制服の内ポケットから組み立て式の柄を取り出し、取り付けた。そして刃となる木片を先端につけた。

「雑刀だと！？」

「僕は……あんたらを許さねえ！」

この際明かしておこう。僕の父はなぎなた術の達人だった。

1 - 2 1 囚われの七夕（後書き）

まさか奈於ちゃんが薙刀を持っていたとは…
びっくりでしょう。

1 - 22 鋭刃の七夕（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃん薙刀使えたんだ

「僕は天真正伝香取神道流において、
きわまらを討つ！」

「な！なにい！なんのことかよく分からぬ！」

現存最古の武術流儀の天真正伝香取神道流は、別名、神道流、香取神道流とも呼ばれていて、

剣術、居合、柔術、棒術、槍術、薙刀術、手裏剣術に築城、風水、忍術等も伝承されている

まさしく総合武術ともいえる。僕の父さんは剣術、薙刀術、手裏剣術を教えていた。

この世界では名の知れた有名人で、アメリカにも行つて、教えてたとか。

小学校のとき姉さんといつしょに教えてもらつてた。

よく剣術と薙刀を練習したなあ。手裏剣は…ノーコントロール。

「総員、かかりーーー！」

暗闇の中からたくさん的人が現れた、だけど…

相手の拳を柄で受け止め、すかさず腹に蹴りをきます。

けれど別の拳が僕のわき腹に浅くヒットし、少し体制が崩れた。

「…人数が多い、これはけつこう苦戦しそうだな。」

僕は後退し、相手と距離をとった。木片を…刃にとりかえるために。

「…ザンテツケン
斬轍鍵！」

残像を残し、光の速さの如く一瞬にして、相手を斬り倒す。

ただし外傷は与えない…相手のあばら骨を3本断ち切る技だ！

「ぐおお…。」

20人程度かな？慎也の病院はフイーバー状態になるだろう。

「きさま…女子のくせになぜここまで強い…！」

「女子じゃねえし、なぎなた術を翻つていた、けど…」

「ここまで過ごしてきた、大切な仲間たち、みんなを…

「僕の大切な人たちに手を出したあんたらが許せねえんだ…！」

僕は薙刀をまわしながら、相手に立ち向かった。

「残念だな…」

その瞬間、背中に強い衝撃が走った。薙刀が腕から離れていく…！

鉄パイプをもつた男！まだ仲間がいたのか！

「ぐう...」

「おれの父はマフィアだからな…銃くらい持つてるんだよ。」

向けられた銃口がきらりと光る。これは死を意味することだわつ。

「奈於くん！奈於くん！」

「返事して奈於ちゃん！」

扉の向こうから慎也と桜沢さんの声が聞こえてきた。けれど扉は開かない。

晃弘と真夏は田を覚ました。が、そのとき僕は銃を向けられている
といいだ。

「奈於」。

「ねやおや、ちゅうじこにじるんで田を覚ましたか。ここでの死に様を見てから、
あとを追うがいい。へへへ…」

せめて……」で澪が来てくれてたら、助けてくれたら……

「じゃあな、奈於ちゃん。」

も「…万事休すか…

ドーン…!

すさまじい轟音がどじりこた。ただし扉から。

「なんだ…！？」

扉はほこりが舞つて白く見える。どうやら扉は破壊されたらしい。

すると部長がもひでいた銃はなにかに弾かれて飛んでいった。

「まだ！僕は跳ね起き、薙刀を手にとつて構えをとつた。

あれ？壁に突き刺さっているのって…ナイフ？

すると、どこかに聞き覚えがある声が倉庫内に響いた。

「すみません。弟に手を出さないでもらえますか？」

1 - 22 鋭刃の七夕（後書き）

そろそろです、あと2日ですべてが終わる…

1 - 23 星夜の七夕（前書き）

前回のあらすじ

すごいね、薙刀術。

ナイフを持つて現れた人、それはまさしくあの人だった。

「ね……姉さん……！？」

「奈於ちゃん、怪我はない？」

「く……姉だと……」

「そりゃ。私はこの奈於ちゃんの姉、風巻茜よ。」

異常なほど姉さんがかつこよく見えた。変態のくせに！

「くそ……たかが一人増えた程度で我らは負けん！」

部長は鉄パイプを両手にもち、襲い掛かってきた！

「つおーらーしねええ！」

相手の乱雑な攻撃をいとも簡単によけている。厳しい修行をつけたことのある姉に

とつて、たやすいことだらう。

「部長！援護するぜ（殴

「まつたく…ボクたちを放れていないよね？」

晃弘と真夏も繩を切って救出した。あとは決着をつけたのみ。

「このーこのー」

「悪あがきは、そこまでね。」

次の瞬間、姉はバック転で背後にまわり、ナイフを逆手に持った。

そして…相手の首元を切りつけた。

「さうあ…」

ドサッ

「みねつり…。」

「ついて僕らひとつも外傷を『えず』に、敵を全員たおしたのである。

「うん。今日は僕たちだけじゃ危ないよつな気がして。」

「え？」

「慎也くんが、教えてくれたの。」

「ところで姉さん、どうして僕の場所が分かったの？」

と、僕たち姉弟の声がはもって、おかしくなつてわらつてしまつた。

「いや…それほどでも…」

「それにしても2人ともすごいかったですね。」

「まあ昔はみんな信用してくれなかつたからね。」

「まさか風巻がほんとうに薙刀を持っていたとはな…。」

「澪ちゃんが風邪をひいたからお見舞いしに行つてたの。そしたら拉致事件が…。」

「澪ー…わつこえぱ僕名義でケーキが贈られたそうだけ…。」

「奈於ちゃん字制と違つていて怪しかったので、今は私たちの家にありますよ。」

「よかつた…。ほんとうにありがとう姉さん。」

「わつこえぱ、今日は七夕だったね。」

「ん? 姉さんどうしたの?」

すると、姉さんはいくつかの短冊が飾られた、小さこ簾をとりだし

た。

「奈於ちゃんのお友達みんなの願い事よ。」

「えー、いつのまにこんなもの…」

それはそうと、みんなは何を書いたんだ？

・「つかあいつにメイド服を着せられますように」

海野原慎也

少し寒気がしたのは気のせいであつてほしい。

・「いろいろなことで慎也くんに勝てますように」

梶沢梶

梶沢ちゃんらしい、負けず嫌いな一面が出てる願い事だなあ。

・オレは天才だ…

坂本翔

もはや願い事じゃない。

・今度からしマヨネーズ味のクッキーが焼けますように

沫雪

莢香

よつによつてその味に行き着く英香が恐い。

・わたしの思い、みんなの思いが報われますよつて。

樹雨濬

「これは…濬か。さすがみんなのことを考えてくれている、でもわたしの思ひってなんだろ?」

・全国大会へいけますよつて。

河本真夏

そうだ、大会は近い。晃弘のため、みんなのために全国へいくんだ。

あとは晃弘の短冊は…これが。

・みんなを全国へ行かせてやりたい。行かせてやるんだ。

水

野晃弘

「これは願い事じゃない。決意だ。」この短冊からは晃弘の執念が宿つているように思えた。

「奈於ちゃんの、願い事は?」

僕の願い…

「僕の願いは、全国へ行くこと、でもそれだけじゃない。」

僕がなによりも望むもの。栄誉よりお金より大切なもの。

「この仲間たちと、この先も分かち合えますよ!」

今日の七夕の夜は晴れていて、星がきらきらと輝いていた。

あの星たちは、僕に、みんなに希望をもたらしてくれていいだらうか。

人間嫌いの僕に、優しく輝いて、照らしてくれるのだらうか。

…僕らの戦いに、一つの区切りが訪れようとしていた。

1 - 23 星夜の七夕（後書き）

さあ、いよいよ第一期最終話!
あした、すべてが終わる。

1-fin LAST SWIM (前書き)

これがひとつ第1期最終話…

1-fin LAST SWIM

7月17日土曜日、とうとうやつてきた町内文化体育大会。

「全員集まつたな。これから我々は全国への切符を手に入れるために、

精一杯戦い抜く。選手でないものは、一生懸命応援するように。」

『よいよこのときが来たんだ。僕らは、全国へ行くんだ……！』

『選手の方は、着替えをしてプールサイドへ集まつてください。』

「行つてこい、わたしもすぐ行く。」

『がんばれよーー！』

『応援してゆからなーー！』

『結婚していくださーー！』

声援を背中に受け、僕と勇人、真夏、そして…晃弘は歩き出した。

あの七夕の翌日、金井良助が怪我をしたことを知った。

どうやら登校中、晃弘があいつらに捕らえられていたところを助けたせうだけじ、

相手の蹴りで右のふくらはぎをやられて、晃弘もたすさんことができなかつたそうだ。

お見舞いに行つたとさだ。

「すまないな……選手なのに、こんなふがいない」とになつて……」

「晃弘を助けよつとした」と、ほんとに感謝してゐるよ。」

「おれの代わりに晃弘を出してやつてくれ。そつ将軍に伝えてくれ。それが今のおれにできる唯一の罪滅ぼしだ。」

いつして、晃弘は正式にメンバーになつたのだった。

『えー、これより町内文化体育大会をはじめます。』

今回は、個人種目と団体種目があるけれど、今日は団体種目が行われる。

400メートルメドレー、リレーで、4チームは1ブロック、

全部で3ブロックあって、勝ち上がった3チームが、県大会へと駒を進めることが出来る。

『みなさん、健闘を祈っています。』

いよいよだ…

僕らはCブロックの3番だ。1と4番のチームは余裕なのだが、2番のチームは、
平泳ぎと背泳ぎが異常に早い、勇人と僕が、がんばらないといけないのだ。

「まさか…俺がこの舞台にたどるとまな…。」

「良助の分まで、がんばってよ。」

「しばらくして、晃弘はこう言つた。

「これで…約束が果たせるかもしれない…けれど。」

「けれど?」

「俺さ。全国へ行く」とってそんなに大事なもののかなつて考えてた。」

「え? なこをこまさり?」

「俺たちも、全国へ行くために泳いでるんだろ? でもわ、俺たち…」

「なこ?」

「泳ぐ本当の目的を忘れてこむよつな気がする。」

本当の…目的?

「うん…」

「がんばりまわな、みんなのためにも。」

『それえは選手はスタートの準備をしてください。』

…僕らなら、絶対にいける！

全国出場一つのみに定まっていた。

恩返しのため、真夏との約束のため、でもござりであるひとみんなの心は

『それでは、じブロックの予選を開催します。』
とつとり、やつてきた。僕らは、じの日のためこころまでがんばってきました。

「よーい」 ドン！

これまでに何回もスタートの音を聞いてきたけど、今回だけは少しびっくりしてしまった。

バタフライでは負けないであろう勇士は、着実に差を引き離しつつある。

スタートが肝心なこの競技では、とてもおいしい。

『がんばれーー。』

『離すよーー。』

声援があちこち聞こえる中でも僕らのチームの応援はよく響いていた。

ふと観客席の方を見ると、姉さんと晃弘のお母さん、それに澪もいた。

こちらが見ているのを気付くと、手を振ってきたので少し恥ずかしかった。

僕は、力強くうなづいて返した。

独走状態で勇人は帰ってきた。次は真夏…がんばってくれ。

1・4番チームは離したのだが、2番チームが食いついてくる。

特に背泳ぎ、平泳ぎで加速をかけてくる。

ターンを3回済んだところで、差はもつなくなっていた。

真夏はピッチをあげて…え…？

「ペースが…落ちてる…？」

右腕が、動いていなかつた。左腕だけで、推進していた。

「まづい！かなりはなされる…」

真夏が15メートルを泳いだ時点で、2番チームはもう交代していった。

『真夏ちゃん！がんばって…』

『あと少しだよー…』

仲間たちが、必死で応援している。ただ、ゴールへ導くために。

「真夏ーあと少しー」

「真夏ーあとは任せろー」

真夏が壁にタッチしたといいと、晃弘は飛び込んだ。

たのむぞ…

「いじめんね…私のせいだ…」

「いじよ、よくがんばっててくれた。せやく医務室に行つて診て貰つて。」

「うそ…あつがとひ…。」

もつすでに40メートル差がついている。しかも相手は速い。

僕らは…ほんとうに全国くいけるのかな…。

『晃弘ー…あきらめんなー…』

『そのペース保つてナー。』

晃弘は、驚きのペースで食いついていた。

選手になつて1週間の間、いじめで誰よりも練習に取り組んでいた。

全国をめざすために、自分を助けようとした、良助のために。

そして、真夏との約束をはたすために…

けれども彼はいつ言ったのだ。

俺だ。全国へ行く」とってそんなに大事なもののかなつて考えてた。

泳ぐ本当の目的を忘れてこようかな気がする。

背泳ぎの時点で、あれだけ絶望的な状態になつても、あきらめず、泳いだ真夏、

そして応援してこるみんな。

全国へ行くためが、目的……じゃない。

「奈於。もうおまえの出番だ。」

「あ、うん。」

差は……前より縮んでいる。晃弘……

「あとは……まかせた！」

「ああー。」

そして、僕は飛び込んだ。みんなの意思を受け継いで。

僕はこれまで、ただただ恩返しをするためだけに泳いできた。

かつての僕を、みんなは変えてくれた。

だから、利香が教えてくれた水泳で、全国へ行けば、みんなは喜んでくれる。

でも、それは恩返しじゃない。罪滅ぼしに過ぎなかつた。

『さあ、3番チームが2番チームに追いついてきたー。』

差は1.5メートル。相手はもうターンをして、最後の2.5メートルを泳ぎ始めた。

続いて僕も勢いよくターンして、相手を追う。

『がんばれ奈於ちゃん!』

『もう少しー!』

泳ぐこと。それは頂点を目指すこと、みんなとの力を削ることができる競技。

いろいろあるけど、僕は重要なことを忘れていた。

水泳をやるにあたり、いちばん大切なこと。

かつて僕が、しまいこんだ感情。

『さあ、差はもう近い！果たして、どちらが先にゴールするのか！？』

もつ差はない！残り5メートル、僕は、決死の思いで手をのばした
。 。 。

『…勝者、2番チーム！』

こうして、僕たちの水泳は終焉を迎えた。

1-fin LAST SWIM (後書き)

これで終わり……なわけねえだろおえ！

そんなわけないじゃん！

あと1話あるよー

真夏が転校することを知ったのは、それから一週間たつてからのことだった。

最後の別れの挨拶を、駅ですることになった。

企画部全員で、真夏を見送ることになった。

「実家にかかることになりました。なのでみんなとは今日でお別れです。

私のために戻してくれて、ほととぎにありがとうございました。

」

「真夏は…大人になつたね。」

「これも奈於。あなたのおかげよ。私をいちばんにはげましてくれたもの。」

「そりや、幼馴染だもん、助けずにはいられなくて。」

「くすり… カサガ奈於だね。」

「でも僕も真夏ちゃんの状態が、こんなにもよくなるなんて思わなかつた。」

奈於くんはすうじこよ。」

「慎也まだ…。」

「それにしても… 晃弘くんは約束を果たせなかつたね。」

「まあな。でも… お別れだなんてな…。」

いちばん辛いのは晃弘だと思つ。約束も果たせず、離れ離れになつてしまつのだから。

「晃弘君…。」

電車が来た。もひお別れの時がきてしまつた。

「じゃあ、真夏ちゃん元氣でね。」

「ボクも応援してゐるよー。」

「がんばってね真夏ちゃん。」

「オレが応援してれば、いつかは幸せになれるや。」

「河本先輩、今までありがとうございましたー。」

「元気でね、真夏。」

「じゃあな……真夏、いつか、ビックで……」

「ひさ、みんなありがとひ…わよなひ。」

「ひつて、真夏は電車に乗り、電車は出発した。」

「晃弘…。」

「いーんだ…これで。」

「ねえ奈於ちゃん。今まで黙っていたことがあったの。」

「え? なに?」

「真夏けやんの失踪した日、わたし病室で真夏けやんに会ったの。」

「えー。」

「『』めんな。窓を眺めてたら、やつれた女の子が歩いてて、思わず病室を飛び出して

連れてきたの。それが真夏ちゃんで、いろいろ悩みを聞いてたの。奈於ちゃんも来るだろ?と思つて、真夏ちゃんを市販プールに向かわせたのも
わたしなの。」

そつだつたのか…どうりでの懐かしい香りがしてきたんだ。

「そつだつたんだ。あつがとつ、澪。」

「え?」

「真夏の居場所を教えてくれて。」

「…みー…こたしまして。」

でもあの懐かしい香りって、真夏の匂いだったんだよね…?

そつだ、これ晃弘君に、ほひ。」

「ん? 余韻? れは…?」

見たことのあるラズベリーの花絵の封筒…

「真夏ちゃんからの手紙よ~。」

ぴりぴりと切り口が開かれていた。内容を見てみると…。

『 拝啓 水野晃弘さま。』

この1ヶ月間、あなたとみなさんの協力のおかげで、とても幸せな日々を

過ごすことが出来ました。ほんとうにありがとうございました。

私が君を好きになったのは、自主練のときにストーカー犯に出くわした時、

一生懸命守ってくれたときでした。ほんとうに、かつてよかったです。でも私のした約束のせいでの心はズタズタに引き裂かれてしましました。

ほんとうに…ごめんなさい…とても悲しかった…

でも、君は私を愛してくれた。そして、チャンスはめぐつてきました。

しかし今度も私のせいで約束を果たせずに、終わってしまいました。私は、君を不幸に陥れることしかできませんでした。

だから私は決めました。君をこれ以上悲しませたくない。

私は、あえて実家に帰ることに決めたのです。』

「 真夏…へビーチ…俺はぜんぜん楽しかった! 不幸なんかじゃなかつた! 」

『 私のことは忘れてしまってもかまいません。

また別の恋をしても、君が幸せならそれでいい。

私は…君の幸せを望むだけ。

けれど、心のどこかがうずいています。

別れたくない…私を忘れて欲しくない…

涙が止まらなかつた…でも、勝手なことはもうしない。

いつか、また会こましょ'ハ。それから、いつぱにむ話しましょ'ハ。
も'ハ、迷'ません。これからもがんばって…
よ'ひなう、今までありがと'ハ。

より I wanna be with you. 河本真夏

「真夏……………」

『I wanna be with you.』
わたしはあなたと一緒にいたい

「真夏わやんせ……こい子ね。晃弘くさんのため!!」。

「……真夏。分かつた。俺はがんばる。」

「晃弘」。

「大丈夫、いつか…また会えるから。」

夕暮れは、僕らに別れの苦しさを教えてくれた。
と同時に、これははじまりなんだ。

僕は水泳は泳ぐことを楽しむものなんだといふことを痛感した。

わざと、どんな水泳選手も、泳ぐことが楽しくて、しょうがないと思ひ。

真夏は、その楽しさを取り戻したかったんだ。

もう夏休みだ。中学校最後の…

3月に、僕らは卒業する。別々の道を、歩くことになる。

遠いよつで、あつといつ間なんだよつな。

だけど僕は願ひ、この天下に向かつて。

『I wanna be with my best friend.
』

G E O F S W I M f i n

S T A

1 - E x I w a n n a b e w i t h y o u · (後書き)

「わたしはあなたと一緒にいたい。」
素敵な意味です。

さて、これから第2期が始まります。
テスト近いので、更新きついのですけどね。
これからもよろしくお願いします。

2 - STAGE OF SING

僕は人との別れの辛さを知つた。

人を恐怖の象徴としてきた僕は、勘違いと成り行きによつて1人の少女に出会つた。

その人は、僕に対しておどけた口調で、無邪気な笑顔を見させてくれたり、

優しい口調で、僕を救つてくれたりしてくれた。

あの1学期、晃弘は約束を果たせず、最愛の人と別れていつてしまつた。

僕には、人をこんなに愛することがよく分からぬ。

でも今は：

「おーい！奈於！はやく行くぞ！」

「奈於ちゃん！」

「あ、うん。夕飯なに作つて欲しい？」

「そうだな……夏野菜カレーでも。なす入りで。」

「やー！それはだめ！」

高校生になり、新たな友達と過ごしている。

今思い返せば、彼女は僕に様々なものを残してくれた。

でもそれも遠い思い出…

あの2学期のころからだったのかもしれない。

人を、好きになることを知ったのは。

「ねえ、奈於ちゃん。」

「ん？ なに？」

「企画部みんなに伝えて。帰りに会議室に集合するわ。」

2 - St STAGE OF SHZG (後編)

やつてまいりましたSTAGE OF第2期！
これからもよろしくね！

2・1 ◆画会議（前書き）

「どうもお久しぶりだね。榎だよ。」

「風巻奈於です。いよいよ第2期が始まったね。」

「そうそう。でもさくたんはまたなにか変なことを思ついたみたいだよ。」

「僕嫌な予感しかしない…」

「あ、そういうえばたくみんさんの作品とこの小説が本格コラボする予定だって。」

「向こうもしてくれるみたいだって。」

「あちらは、奈於ちゃんとボクを絶対に使いつらじいんだ。」

「うなんだ。でもなんで…あれ！？」

「…あ。」

過去のトラウマ、痛みがえつたり。

2・1 企画会議

「えーと…出席どうつか。」

2学期が始まつて3田田の今日、企画部の集会が行われた。
ちなみに後々聞いたけど、この部は部長であり前期生徒会長の樹雨
濬が

なにか世界を変えるんだ!…といつ理由から発足したらしい。（慎也
(談)

「まず海野原 慎也く〜ん。」

「はいー。」

海野原 慎也は幼馴染の男前だ。生まれ変わるのならこんな人にな
りたい。

「つぎに水野 晃弘く〜ん。」

「はい。」

水野 晃弘も幼馴染の一人。バカだけど写真と絵が異常に上手い。

「桜沢 桜ちゃん。」

「はいはーい。」

ボクつ子の桜沢 桜さんは慎也とライバル関係を築いていたりする。

「坂本 翔くんに沫雪 茛香ちゃん。」

「オレはこじや…。」

「はーい。」

パソコン部兼企画部の2人。坂本 翔は根っからのナルシストで、なにがあるたびに

「オレ天才」とつぶやいているバカだ。

沫雪 茂香は唯一の2年生で、いろいろ頼りになるいい子だ。

「最後に、風巻 奈於ちゃん。」

「くん呼びしてくださいー！」

僕、風巻 奈於は、6月の文化祭のとき、漫才のネタ「」ときで澪に指図されてしまった、

れつきとした男子だ。

「今日、みんなに集まつてもらったのは、企画部の今後の行方についてよ。」

「今後の…行方？」

「一応、わたしたち企画部は非公認団体として発足したわね。けれど真夏ちゃんの一件で、とくに大きな活躍をできなかつたため、公認はしばらく見送ることになつたわ。」

「質問です。公認団体になると、いいことがあるんですか?」

「莢香ちゃんいい質問ね。公認団体になると、“活動資金”が得られるの。

あと顧問の先生もつづるので、常識の範囲内で大きな活動をすることができるわ。」

「それじゃあ、公認になるためにはどうしたらいいのかな?」

「それが今日の話題よ。10月の23日に、なにが行われるか知ってる?」

「たしか、光鳴湾中学校30周年誕生際…だった。」

「そのとおり。そしてわたし、夏の生徒会での会議に、こんな企画を提案したの。

名づけて『非公認団体催し人気決定戦!』

「うわあ、すばらしいです!」

「興味はあるな。」

「どうこう」とをやるのかな?」

「えへん。」この学校にはたくさんの非公認団体がある」とほみんな知つてゐるかしら?」

「俺は写真クラブも掛け持ちしているが、非公認はたしか25はあつた気がする。」

「その我々を含めた非公認団体全クラブで催しものをして、一般生徒のアンケートで最も人気の高かつたクラブは、晴れて公認団体へと昇進できるものだわ!」

「つまりは…それで1位を狙うのか。」

なるほど…でもあれ? 鶴つてたしか…

「鶴つてたしか、光鳴湾中学校前期生徒会会長兼公式活動団体審議委員会生徒代表だったよね?」

「奈於ちゃん…よく覚えたね…。」

なぜか覚えてたんだよな…なんただろう?

「鶴の力なら、ここにできたんじゃないの?」

「わたしだけが審査していないから、却下されたかったの。」

「それで、催し物はなににするの?」

「それを今から決めまじょう。みんなにがいいかしら?」

いろいろ討議の結果、ここまで絞りこんだ。

『ミズノ写真館』

『落葉喫茶モリージ』

『翔のまんきつ』

「なんだか系統が似てるわね…。」

「俺が言つのもなんだが、写真館は間違いなくかぶるから却下だ。」

「漫喫はいいかもしないな…。」

「でもさ、入客人数が限られてくるから票を集めにくいんじゃないかな？」

「とすると喫茶店…もかぶるかも。」

「ん?…そうだ。」

「慎也?..どうしたの?」

「晃弘くん、きみの写真の売り上げが高い人ランキングは?」

「え? ああ、3位が樺沢で2位が会長。1位が風巻だ。」

「僕1位なんだ…。」

「この美少女3人がここにいる…とこつ」とはこのことを最大限に生かす方法は…。」

「まつた。僕は男だよ?」

ついに慎也にまで女としてみなされたよ。

「ちなみにこの中で料理が出来る人は?」

「…はーい」

手を挙げたのは樺沢さんと莢香、そして澪だ。一応僕も手を挙げとく。

「莢香ちゃんは厨房決定だね。澪ちゃんは生徒会長だからウエイタ一しかできないね…。」

「あうう。そうだった。」

「僕は厨房に入ることになるだろ? し、樺ちゃんは…ビッちかなく。」

「ボクは別になんでもいいよ?」

「

「男子から人気のある遠山ちゃんと奈於ちゃん。女子から人気のある
桙ちゃんがいるから、

生徒からの信仰は厚いと思つ。でもそれを最大限に生かすには…」

なにかウェイターには衣装を着てもらつか…。」

「それってまさか『スプレか?』

「单刀直入に言えばそつなるよ。翔くんさすが。」

「やつぱりオレ様天才だあ…」

「ちょっと狂人化してると翔。んで誰が着るの?」

「そうだね…そこはいつもパソコン部2人が、いろいろ計算して決
めてもらうが。」

「任せぬ…」の天才にな。

「がんばりますよ~。」

「ま、奈於ちゃんは着る羽田になると思つよ。」

「…はい？」

なんだかんだで、企画部は『衣装喫茶モリージ』の大きな基盤が完成した。

…絶対にウェイターはいやだ。

2・1 企画会議（後書き）

ところが、ついで「コラボ…」でもたらすいいなあ

2・2 企画会議風巻家にて（前書き）

「一週間ぶりだよねこれ…。」

「そうそう、さくたんが『体育大会がようやく終わつたし、3連休くるから今日から一週間くらい更新強化週間にする…』つていつてたよ。ボクは楽しみにしてるよ。」

「というわけです。よろしくおねがいします。」

「奈於ちゃんのあんなことやこんなことがついに…」「いやな予感しかしないなあ…。」

2・2 企画会議風巻家にて

「姉さん、僕にグラタンの“作り方”を教えてください。」

ウェイターを避けるためには…厨房に立つしかない…そういうしてなんとかレパートリーを

増やそうとした結果、こう行き着いた。

「なんで、グラタンなの…？」

結論を述べよう、秋っぽいから。

「とにかくにも、作り方を教えてください。」

「いいけど…なんで唐突にそんなこと?」

コスプレを避けるためといつたら、全力で敵にまわるだらう。

「そもそも手羽唐だけじゃ社会人として死ぬだらうから。」

「…そうですか。あのね、奈於ちゃん。」

「ん?」

「私、とってもうれしいです。」

「へ？」

「奈於ちゃん自身から、いつ姉さんに頼み」」ができるようになったて、お友達とも楽しそうだし、なによりも毎日笑っていて、もう強くなつたんだな、って……こんなに幸せなことはないです。

その言葉は澄んでいて、とてもあたたかく包みこんでくれた。

氷のよつに硬かつたかつての僕は、今はデリケートな水だけれども、そのあたたかさを感じることができている。

「それじゃあ、材料を用意して、作ってみましょうね。」

「うん。」

今はこの生活が、大好きだ。

「え? メニコーを決めさせてくれ?」

翌日慎也は、メニコーの決定権を明け渡すように頼んだ。

「少し候補はあるんだけど...。」

「どんなの? みして。」

「候補」

- ・冷やし中華
- ・ゴーヤチャンプルー
- ・もつ鍋

「…季節に全く合っていない気がするよ。」

「…奈於くん、逆転の発想って知ってる?」

「知ってる。この場合、全く成功しないよ。」

「…一回召集をしてみよう。」

「慎也の逆転の発想を、少し採用してみたんだ。」

その夜、緊急企画部集会はわが家で行われることになった。

そして昨日姉さんと開発したグラタンをみんなに振る舞つた。

「“つくしのグラタン”あえて春の食材をつかつた、冬の訪れを予感させる料理。
なかなか斬新だな。」

「みんな、いっぱい食べていいでね。」

「「「いただきまーす!」「」」

昨日何回も焦がしたこの一品は、受け入れてもうえりえむかな…

「わあ！不思議です！春の訪れを予感させるような、あたたかい味です！」

「「れはす」…。天才のオレが言つんだから間違いない。」

「おじしいわ！」れは絶対にメニューに入れるべきよ…。」

「奈於ちゃんすごかつたですよ。ちょっと作り方を教えると、一人でがんばって何度も何度も焼いていました。」

「姉さん、恥ずかしいからそういうこと言わないで…。」

「でも奈於ちゃんほんとに料理が上手だよね。ボクも負けたくないなあ。」

「あ、そういうえばボクもメニューの提案があるんだ。作ってもいいかな？」

「桜沢さん考えてきたんだ。」

「けつひの自信作だよ。」

「田をぎゅうぎゅうせながらこちらを向いているのは気のせいだらうか。」

「どうで凜ちゃんは料理したりする？」

「せぞるをえないって感じね。一人暮らしだし。」

「えー、漆つて一人暮らししてたの！」

「うん。両親はもういなくて、実家のおばあちゃんがいろいろおくれてくれるの。」

「大根とかしょ「うゆとかお米とかね。」

そうだったんだ。そういえばかつて僕も一人暮らしてたな。

いろいろ大変で、姉さんが来てからけつこう楽になつたけど、

澪は大変なんだろうな。

「うへ、しょうゆのいいかほりがします~。」

「わらわすぐできるよー。」

桜沢さんの料理は、いつたいどんなものなんだ〜?。

2・2 企画会議風巻家にて（後書き）

先についておきますが、桜さんの料理は殺人兵器ではありません。いたつてまじめです。というわけで明日から数日間がんばって更新しつづけます

「はー、できたよー。」

「おお、これはなんだ?」

「ナスにひき肉をほわんでみたんだ。おしゃべり亭にて食べていいつてね。」

「ではいただきます。」

秋茄子だから、少し焼いてあるな…どれどれ。

「あーこれおいしい!」

「なすがパリッとしていて、中のひき肉がジューシーであってます!」

「これはまた…奈於ちゃんに負けてないわ。」

「桜沢さんす」「いね、これはグラタンよりおいしくよ。」

「あはは、でも奈於ちゃんもす」「じやん。」

「他の料理はダメなんだよね…。」

「じゃあ、この2品はメニューに決めましょ。」

それじゃあ厨房は奈於ちゃんに梳ちゃんに頼んでみよつかしぃ。」

「でもあの2人は人気だから… できれば衣装をさせたいんだけれど。」

「じゃあいいよか。問答無用で全員着ると。」

…はい？

「翔くん… きみはなんて画期的な」とを…。」

「まあ天才だからな。」

慎也… もう少し君はうれしそうなんだい？

「それでいい？みんな？」

「賛成でーすー！」

「ちよっと楽しみだ。」

「ボクもいこよ。」

「…オレは着るのか？」

…「わあ。分かるかな？反論できない」の空氣。

「奈於ちゃんの衣装、楽しみですね。私も行きましょ。」

「任せてください。翔くん…全力で着させます…ひとつも似合ひの

を一。」

とつあえず今わかつたことは、ものすいじ勢いで恥をかく運命にあることだ。

みんなが帰ったあと、姉さんは出発の準備にあたっていた。

「アマチュア世界大会…カナダでやるんだよね？」

「ええ。出れるなら出とこひつて。」

日本で有名になた姉は、世界でも注目されつつあった。

「じゃあ、行つてくるわね。」

「うそ、がんばってね。」

「うそ…姉さんとまだ」飯を食べに行つてないな…。」

少し胸を躍らせて いる自分がいた。

2・3 企画部会議提案（後書き）

今日は短めで、明日はがんばります！

2・4 フラッシュバック（前書き）

前回のあらすじ

前書きを入れるの忘れた…

2・4 フラッシュバック

『チャンピオンは—日本代表風巻 茜—（予幕）』

「れはそのあの物語であった…。

『おめでとう…あ」こね茜さー』

「零…茜さんと連絡入れればいいのに…。」

『番町が分からなこか、といふえず奈於ちゃんにめでとつを
えよつと思つて。』

「姉ちたんが帰るのさう口後にならひだりだいだい。』

『よしよしよ。』

『氣が利くなあ、澪は……

Prologue!

『やじもんが奈於ちやん?』

「姉さん、おめでとうー見てたよ。」

『あつがとく、おやかこなことになつてしまつなんて、びっくりしちゃつた。』

「澪も、おめでとうー電話をくれたんだ。」

『あは、優しいのね。』

「やうだね。それじゃあ、いたしかけて待つるね。』

『それじゃあね、今から飛行機に乗ることになったから、明日させ
帰れそ。』

『やうなんだ。じやあおやすみなさい。』

「おやすみ、奈於ちやん。』

予定より早く帰つてくるのか…まあ、よかつたかな、つここの前までいやがっていたの。」。

姉さんも、常識を持つてくれたようだし（卑猥なことは作者が書かないからだ）

それじゃあ…畠田はわざとなんていわれてしまつのか…

朝は小鳥のさえずりで田を覚ます、ありきたりな模様…のはずだつたけれど、

今日はなぜか外の騒がしさで目が覚めた。

「「う…なんかつむれーな…。」

リビングへ行つてテレビをつかみると…

『「ひから、先日世界大会で優勝した風巻 茜さんの自宅です。現在ここに妹さんがいるとのことですが…。』

なんてこいつた。

『「出てきたといひでお話を聞いつけと…。』

外を見てみると、100人はいるであろう報道陣が家の周りを囲っていた。

『「あの茜さんは美人なので、妹さんも美人の可能性もありますよね。』

『

『「ある新聞記者が姿を見たそうなんですが、こちらもまた美少女だつたそうですよ。』

…裏口から出るか。

けれど、寧寧に裏口まで人がいました。最悪です。

『さあ、妹さんは現れるのでしょうか…。』

…もつ行くか。

ギイ…

『おつとー! 出てまいりました! 今回お姉さんが優勝しましたが、心境のほどを…』

『お姉さんは仲はいいですか! ?』

『羨ましい気持ちとかありますか?』

『おめでとうのメッセージを…』

『お友達にもこの件を伝えましたか!』

『心境のほどを…』

僕は戸惑つたのではなかった。おびえていたのだ。

質問を次から次へと浴びせ、必死な顔をしている記者。

フラッシュを何発もたき、「あらも姿をとりよつと必死なカメラマン。

彼らはまるで…僕を独占しようとし、欲に駆られ、人ではない怪物のようであった。

恐い

恐い

いやだいやだいやだ

僕をそんな目でみるな…！

激情に支配され、あの感覚がよみがえった。

あの顔…あの声…！

『どうせ私が苦しんでいるの、分からないよね。』

分からない！ 分からない！ 人の苦しみなんて！

彼らは僕の苦しみを分かつちゃいない！僕は利香の気持ちが分からなかつた！

そのことに驚愕し、怯え、その場に座り込んだ。

『どうしましたー?』

「来ないでくれ！もう帰つて！姉さんに会わせて！僕はあんたらが嫌いだ！」

もう僕にかまうな！消えろ！消えてくれ！」

「うわああああああああああああああ！」

2・4 フラッシュバック（後書き）

まじめな話の時には前回のあらすじが前書きに書かれます。
それ以外？ てきとーですよ？

2・5 引退します、歌こます（前書き）

前回のあらすじ

この先どうしようか迷走していた。

2・5 引退します、歌います

「奈於ちゃん…。」

わたしはある時の絶望を味わった。

ニュースで、奈於ちゃんの様子を知った。とても苦しかった。

2年前、あの子は大切な人を目の前で失ったのだ。

こんなことになつたのは、わたしの…せいだ…

愚かにも病み上がりの奈於ちゃんをおいといて、歌っていたのが間違つた…。

「奈於ちゃん…」めん、せんとに「めん…。」

ぽろぽろと涙を流した。

そして…覚悟を決めた。

もつ歌わない。ずっと奈於ちゃんのそばにいる、と。

『美声の歌姫、突然の引退表明』

悲しかつた。ただただ悲しかつた。

自分のせいで、姉さんは歌を辞めざるをえなくなつたのだから。

どうして…僕は姉さんに歌つてほしかつた。

それが僕と姉さんの喜びの一つだつたのだから。

ただ、僕が取り乱したせいで、姉さんを苦しめることとなつてしまつた。

帰つてくるのは明日…。

なんて迎えたらいいか、分からなかつた。

「風巻…だいじょ「つぶか？」

「うん、大丈夫。ちょっと取り乱しちゃったからさ。」

「奈於ちゃん、元氣～？」

「奈於くん、昨日は大変だつたね。」

「うみんな励ましてくれると、自然に気力が戻つてくれる。少しだけ
だけど、

悩みもどうでもよくなつたりする。

「ああ、席につけよ～。今日は合唱の曲決めを行つからな。」

…合唱？

2・5 引退します、歌います（後書き）

テストもあったし、これからもあるので
更新はきついです。

2・6 歌は私の魂（前書き）

「なんだか久しぶりだね、奈於ちゃん。」
「そうだね桜沢さん。2ヶ月ぶりじゃないかな。」
「うーん、ボクらにとつてもいよいよ“受験”なんだよね。」
「勉強してないな。」
「だから勉強もあるから、更新は奇跡なんだって今回。」
「…まあよくがんばったよね。」

2・6 歌は私の魂

「というわけで、候補はこの2つでいいな?」

・結びつけられた葉

• Song Is My Soul

「では多数決をとる。好きなほうに手を挙げろー。」

今自分の心境にふさわしいのは『Song Is My Soul』のような気がする。

また姉さんに歌ってもらおうのは、この曲しかない。

多数決の結果、慎也を除いたほぼ全員、『Song Is My Soul』を挙げた。

なぜだか慎也は驚愕の表情を浮かべていた。

慎也の表情が気にかかつたが、それよりも姉さんはもう帰っているのか気になった。

「…帰つてたらなんて言おうか。」

歌といつひとに敏感である姉さん、せつと今度の話をしてたら

『まあずくなるだらうし。

「…でも言わないとなあ。」

ずっと黙つてもいつかはばれるし、それはそれで姉さんを傷つけかねない。

『つやから家に明かりがついていたので、姉さんはもう帰宅しているよつだい。

……

ガチャ

「ただいま～…。」

「あ、おかげ～」

うん、想像以上に元気だった。

「あ、姉さん…歌やめるつて…。」

「あんまり立つてもね、だから今度で最後にするわ。」

「今度…？」

「10月23日の学園祭がラストステージ、とこりひとで、メディアには秘密なの。

奈於ちゃんの合唱コンも楽しみね～。」

この姉…心配して損した。

「奈於ちゃんは何歌うの？」

「『Song Is My Soul』っていう曲。たしか姉さんも歌つたよね？」

「懐かしいわ…『歌は私の魂』ってかつーいじやない？」

「うん、そうだね…。」

姉さんの魂である『歌』を奪つたことに、また胸が締め付けられる。

姉さんは小学校の頃から、歌が好きだったそうだ。

中学、高校は独学で勉強をし、専門学校へ推薦入学したほど、努力家だった。

自分は奪つたのだ。奪つたんだ。奪つたんだ…。

次の日、慎也は学校に来なかつた。

2・6 歌は私の魂（後書き）

この曲、中1のときに歌いました。
今回この作品にマッチしていたので、
使用させていただきます

2 - 7 あの歌は危険だ（前書き）

前回のあらすじ

暇さえないが、あつたら更新することに。

2・7 あの歌は危険だ

「慎也くん、あの歌は呪われているって思い込んでるんだ。」

桙沢さんから異変について聞いた。

中学1年のころ、慎也のクラスでの歌を歌うことになった。

彼は指揮者をやって、クラスのみんなをまとめていった。

僕は見ていなかつたけど、本番も大成功を収めていたように見えた、けれど実は、裏に大きな事件があった。

それは本番前日のこと、じつやうりクラスで揉め事があつたらしい。

そして誰かが…中心人物である男子を、床にたたきつけたらしい。

これによつてその子は怪我をし、ショックから転校していったそうだ。

慎也は指揮を振りつつ、役目を無事終えた。

けれど…異変はその後に起つた。

あんなに仲のよかつたクラスが、荒れ始めたのだ。

落書き、いじめ当たり前。乱闘なんかしようつちゅうで、

不登校も多くなつた。

みんなはこれを呪いと思い、恐怖に支配され、クラスは壊滅寸前にまでなつた。

けれど慎也と、違うクラスだった梶沢さんが協力して、なんとか立ち直つたといつ……。

「そのひの慎也くん、正氣がなかつたよ。ボクもなんだか悲しくなつてきちゃつて、

いつしょに協力しようつ、つて手を差し伸べたなあ。」

「…やうだつたんだ。」

「今回ボクも、どうしようつか迷つたけど、やっぱり同じ失敗を繰り返したくない、

と思つたし、みんながいるからチャレンジしてもいいんじゃないかなつて

手を挙げたんだ。もう一つのまづ手を挙げた子は、かつてのクラスだつたね。」

不安はあるけど、梶沢さんがいれば大丈夫なんかじゃないかという

期待もある。慎也も恐れる必要はないと思つけど……。

i podで何度も聴いて、歌つていたところ

姉さんは買い物だし、僕しか出る人はいない。

「はい、風巻ですけど…」

「…うな。」

「はい？」

「歌うな。わたしが呪つてやるんだ。」

ガチャン！

「はあ……はあ……」

なんだ今の……

呪いつて……一体……

2・7 あの歌は危険だ（後書き）

ちょっとふざけようかと思つていいたら、
けつじつ真面目になつちゃうやう。

2-8 ほつたらかし（前書き）

「久しぶりよ！わたしが出てきたのー。」

「澪…うれしそうだね。」

「だつてしまらく出番なくて…奈於ちゃんもつれじいよねー？」

「まあ…」

2-8 ほつたらかし

「…そんな内容だった。」

「…え？」

翌日、桜沢さんに昨晚の電話について打ち明けた。以前起こった事件から、心当たりのある人を

彼女は知ってるかもしないからだけど…

「女性の声ねえ…考えられるのはそのクラスだった子だと思つけど、ボクは分からないなあ。」

残念、収穫はない。今日も慎也は来なかつたし、不安は募つていくばかりだ。

空は無駄に青くて、雲ひとつ無い快晴。あんなふうに不安、恐怖、全部晴れ渡つてしまえば

どんなに幸せなのだろうか。陽の下で咲く花のように、揚々とできぬいだらうか。

1日は、それでも進んでいった。

…そして、企画部の召集が入った。

澪は相変わらずだらだらしていて、なんだかパソコン部の一人が意氣揚々としていた。

莢香の「」は可愛いけど、翔の「すら笑いが恐い。

「ねーねー、慎也くそどつしたの？」

澪…そんなタイムリーなこと訊かないで。

「あー、分からぬけど調子悪いらしいんだ。」

桜沢さんのフォローに感謝です。あ、なんか莢香がしゃべるっぽい。

「えー、今日はみなさまにお知らせがあります！なんと…

喫茶店で着る衣装が決まりました…！」

あ…ほつたらかしてた。感謝祭企画。

「おおー、[写真]真ネタが増えるぜ。」

「どんな衣装なのがなあ、楽しみだよ。」

「早く見せてー。」

「慌てるな。一人ずつ発表していく。まずは慎也とのオレ様だが、この執事服でいくとしよう。」

けつこう漫画でありがちなタイプ。カッターシャツにスース、そしてリボンと

慎也にお似合いなタイプ。ある種、翔は薔薇を加えさせたら似合うと思う。

「続いて桜先輩は、橙の紅葉をイメージした衣装ですー。」

「きやーーかわいいわねー桜ちゃんいいなー。」

黄色の生地のうえにオレンジの布と、ギザギザのすそで

紅葉をイメージしたスカート。カッターシャツの上にオレンジのベスト、蝶ネクタイと

かわいいデザインになってる。似合いやつだよね。

「あ、莢香ちゃんの衣装はどうなったの？」

「それはですね、風巻先輩といつしょなんですね！」

と出されたのは…エプロンドレスの黄緑色版に、一般的なホワイト
ブリムを頭に添えて。

世間では、それを“メイド服”という。

「これは写真出したら売れるわな。」

「楽しみだなあ。2人の晴れ姿。」

あはは…僕のXマークは近いのかな

*

「いいよね澪は。衣装着なくて。」

「わたしだってかわいいの着てみたかったもん！生徒会長もいろいろ大変なの。」

帰り道、いつもの澪との会話。桜木の道を並んで歩いて、

今日もいつも通りの風景と思つてた。

けれど、本屋の前の交差点で、ぱつたりであつた人にはたいそう驚いた。

「え…慎也？」

「…あーあ、見つからつちまつた。」

2-8 まつたらかし（後書き）

ギャグに走ったらまたまじめー

2・9 駆けい（前書き）

前回のあらすじ

いやあ、知人にばつたり会うなんてそりそりないぜ

2・9 隠ぺい

結局僕らは、近くの喫茶店で談をとむことにした。

僕はカプチーノ、澪はブラックコーヒーを頼み、慎也に訊いてみた。

「2年前…僕がいなこときになにがあつたんだ?」

「わたしがここに来るまでに、なにがあつたの…?」

…慎也は押し黙っていた。むろんぼくらも追及はしない。

ウェイターが置いたカップからのコーヒーの苦い香りが鼻をくすぐった。

同時に胸のなかでなにかがくすぐるよつな…言葉では表せられない不安が募る。

それは慎也がなにも言わないから…やつなるのかも。

「…なあ、慎也。なんとか言つて」

「わかつた…ちなみに言つておぐが、これは学園全体の黒歴史だ。
しかも…
隠ぺいされた事実そのものだ。」

「学園が…隠した事実?」

「ばれたら、ここは存続は危うい。」

「…ほんと、なにがおこったの？」

慎也から語られた事件は、僕が桜沢さんから聞いたものよりも、想像を絶していた。

*

1年3組、そのクラスはもう存在していない。

合唱コンクール、生徒たちは「Song Is My Soul」を懸命に練習した。

その声は美しくて、もう優勝は余裕かと思っていた。

けど…そのときに“ヤツ”は来たんだ。

名前は山川絃磁。^{やまがわげんじ}一見はふつつの生徒だ。

けれど…彼は大富豪の坊ちゃんで、クラスのことなんぞいりでないと考えてた。

当然合図「ン」なんて真剣にやうりす。しかも…

「「」れやる意味あるのかなあ。ほんとはみんなめんどくせこんでしょ。」

「ア」の君だつて、あぐびばつかして、本当はやる気ないんでしょ。

」

彼から放たれる毒矢は、クラスをつなぐ鎖を溶かしていった。

ある日、こつもの練習中…

「おいまんな、以前より歌の質が落ちてこるぞ。やる気はあるのかー！」

「無駄ですよ先生、」こりらせる氣なんてそもそもないですよ。」

「山川くん…！」

「ダメですよ先生、僕ちんに手を出したり、立場が危ないですよ~。」

先生は指導することも許されない。だから絃磁は笑った。

「へへへへへへ！みんな立場が大事なんだね！立場さえあれば、世の中いろいろいもんね！」

最高だよ！まじ人生最高だよ！はははははははは…！」

だから…みんな許せなかつたんだ。あいつのことが。

誰かが絃磁の胸倉をつかんで、後ろに引いた机のところに投げつけ

たんだ。

それから1発、頬を殴つて、こいついたんだ。

「…おまえみたいなエリートは死ねばいい。」

そうやって、その子は教室を出て行った。

そんな偽善ふつた情けない子…名前は海野原 慎也だ。

*

「大問題だったよ…中学校はなんとか山川に泣き付いて、事実の隠
ぺいのために

大量の慰謝料払つて…けれどやつらは僕らのクラスに圧力かけま
くつて…

結局僕と桜ちゃんがなんとかしたけど…傷は癒えなかつた。」

「…慎也くんは、どうしてその子を殴ったの?」

「… そのまんまだ。あんなやつ許せなかつたからだ。」

それはわかる、わかるんだけども…

「けれど僕が恐れているのは、歌じゃないんだよ。」

歌じゃない…？

「じつこいつ意味？」

「帰ってきたんだよ。山三のやつひが。」

…帰ってきた？」の地域にか？

「あいつは海外から帰ってきて、再び絃磁が「」と元学校する」と云なつた。」

「それって…」

「あいつは学園を恨んでる。おしゃく嫌がりで走るだらう。
それがどんなに…下賤だとじつも。」

鳥肌が立つた。一つのクラスを崩壊に追い込んだ絃磁…

そいつがまた、帰つてくる…？

「まさか…慎也…」

「まちがいなく、僕のいるクラス…つまり奈於、君のいるクラスにやつはやつてくる。」

2 - 9 猿べい（後書き）

…どうなるんだこれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9488m/>

STAGE OF

2011年10月7日01時43分発行